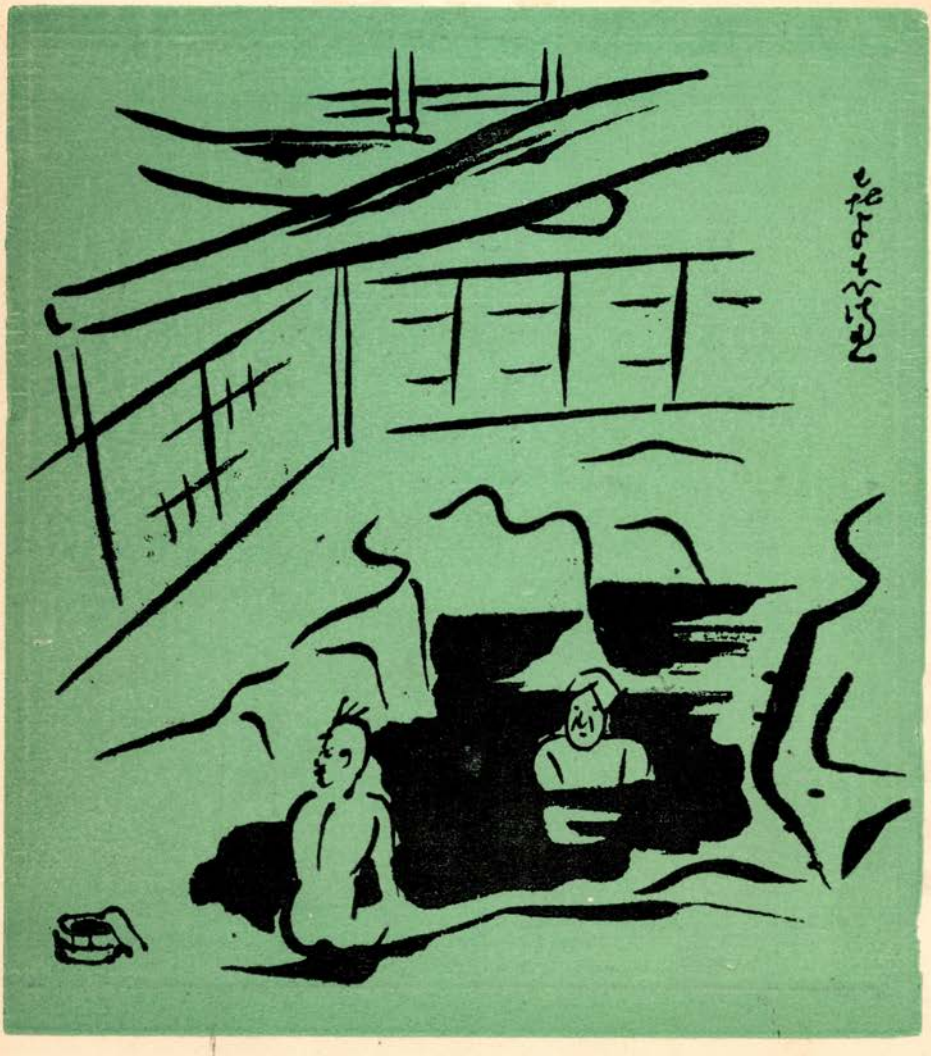
主幹 麻生路郎

川柳雜誌

三月號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年三月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第六卷 第三號

川柳雜誌社發行

三月例會

▼日時　三月五日火曜午後七時
▼場所　南區日本橋一丁目交叉點
　北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼題「洋行」三句
▼會費　三十錢
　初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします、柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第六卷第三號　目次

溫泉（表紙）　吉田清
題字　小出僧
編輯後記　路耶ひろし　素人　二柳子

創作

麻生路郎

感想・評論

麻生路郎
道後二泊
池田滿壽美
川柳は一生の仕事
松盛琴人
川柳家よ團結せよ
津川紫吻
第一卷時代
大山露斗
海鼠の値
桑原京郎
作句妙藥

研究・其他

三好革郎
我觀川柳（二）
生業の古川柳
蛭子省二
川柳旅日記（三）
庄　万よし
月　評
路耶紋太
川柳類題索引
素人　ひろし
川柳漫畫假の姿（三）
ひろし、加香、欣女
麻生路耶評
柴谷柴舟畫

一路集（募集句）

前田雀郎選
足音
麻生葭乃選
咳
岩本素人　八木毒仙　共選
取次
安井ひろし記
本社二月例會
各地柳壇
川柳會架

松盛琴人
岩本素人
岩崎柳路
安井ひろし
○
淺井冷々子
中澤濁水
楊井二南
牧田普門
水谷鮎美
住田亂耽
松丘町二
石川双葉子
六角桂風
伊藤愚陀

酒井駒人
三好革郎
西本三笑
橋本二柳子

粒々集

福田山雨樓
安川久流美
近作柳樽

長崎柳秀
富士野鞍馬
諸家

近作柳樽

路郎選

鍋釜を汚すばかりの日が續き　大阪　雅幽
瀬戸火鉢想ひはめぐり〳〵消ち　同　同
餅のかび削る二月の男なり　同　同
むかうずね抱いて遠い〳〵夢　同　同
聖書一卷いたづらに煤けたり　同　閑生
妻に客あり主人を閑却し　豐中
話しつゝ寢入りし彼の羨やまし　同
紅梅に醜くき戀を思はせる　同
みぶの後ろ電話のベルが鳴り　同
憂鬱の妻にうつりて日が暮れる　同
洋食に別に母丈け母の膳　長崎
賣りに出る姉の素足も十二月　同
花鋏の生命のそれ〴〵や　同　草木
俺が春桑畑からの煙草の輪　同
氣のついた時はおだてに乘つて居た　別府　晃卓
小說を女すぐ身にひきくらべ　同
女學校も出て居りますこ母の口　同
藝丈けは賣れごこ藝者利いた口　同
緣談は針の運びもつゝがなく　大阪　彩秋
編物へ冬の息をば吐きかける　同
議會を罵しりながら夕の膳　同
生れが違ふんだ希望が輝き　同

妻にしてもよいのがたんと喪橋　大阪　竹堂
くれ〳〵も連子を頼み病み續け　同　同
あほらしい人もまじつて多數決　同　同

退院後

喰べてれば母は丈夫と思つて居　備中　光哉
いつ來ても昔のまゝの畑と山　同　同
掌を合す父とはなつて老ひ朽ちむ　同　同
義理や寄附にシャツ一枚が買ひ兼ねる　桑港　敏郎
連設の電話に不義の戀が洩れ　同　同
下に下あり南歐移民の子　同　同
顧みるたびに子供がまだ小さし　松江　雪緒
兵隊もよし勇壯な足で行く　同　同
だまされて皆温室で咲きも咲き　同　同
頼まれて買つて來たのに氣に入らず　鶴の莊　普天
忘れずに旗を出したり一軒家　同　同
若主人毛糸づくめの子を抱き　同　同
恨むらくは達筆の離婚狀　島根　花情
やがては解けむ雪が六尺　同　同
彼が居らねば俺はあの椅子　同　同
强情なだけに律義な男なり　盤ヶ池　湖舟
骨格をつく〳〵と見る年の暮　同　同
早く寢て早く夢見て樂しまむ　同　同
淋しさは慰問品まで當てにして　同　一流
幸福の頂上らしい二十一　同　同
女もう仕送る年になつてゐる　同　同

珍らしき雪祖母負ふてやろ　豊中　石竹
幸福な露松葉を　落つな　同　同
まるさそらそまい父さんと遊そほ　同　神戸　志郎
片時の義理を立てるに社を休み　同　同
慰めに呼んだに母は孫の世話　同　同
うちの子の癒つた醫者をすゝめて見　同　同
久しぶりぢきに儲かるかと尋ね　大阪　觀月
愛の巣に柱時計のあるもよし　同　同
もう柄を自分で見ねば承知せず　同　同
一圓や二圓とは云へ母の恩　同　德島　休歩
可愛い子よ二人の溝を淺くする　同　同
荷駄馬にひとしく生きて妻子あり　千葉　嘉道
主婦となる甲斐性もなく皿をもち　同　同
おつちやんと言はれ言譯程を抱き　大阪　冬陽
けつまづく瓢簞空の音になり　同　同
半賃で乘せる子供に智慧を付け　同　幸泉
急用の使ひは運轉臺に立ち　同　同
金持の息子といふに松葉枝　近江　たけし
聽診の一つ二つは無駄のやう　同　同
そこらまで歩きませうとたまに逢ひ　大阪　テルホ
差しかけた傘を圓タク離れさせ　同　同
出過ぎたへ冷笑の眼をむけるだけ　螢ヶ池　しげる
御廻診時計ばかりの部屋になり　同　同
瀬戸物屋はたいたのから價を聞かせ　神戸　柳川亭
役者との仲も承知で落藉される　同　同
我ながら人がよすぎるなと思ひ　明石　啞聲

生嚙りしてゐるだけに氣を使ひ　同
病妻は榮轉の地を淋しがり　大阪　伴内
針箱に預つて置く子の貯金　同　内
白粉もいつしかっすく二十八　尼崎　吟女
此の寒さ足袋をぬがせこ泣いて居る　同　京都　折草
古い疵子供は自慢さうに出し　同　折草
近頃はあなたのお連れ見にません　同　寿枝女
入營に親より祖母が淋しがり　大阪　寿枝女
ビルディング河へ向つて寒う建ち　同　寿枝女
強ひられて炬燵へ坐る女客　神戸　卯生
かくまでも冷たきものか妻の指　同　卯生
伯母の名はたゞ提灯にのこるだけ　大阪　やなぎ
その言葉ふこ今までがうたがはれ　同　やなぎ
戀で死ぬ程あの女よくもなし　東京　雨月
まだ話あるんですがこ辻電話　同　雨月
交番の前は近所が雪を掻き　島根　樂山人
何こでも云へこ二人は狹ふ住み　同　樂山人
馳けつけて見れば寢床は北を向き　大阪　蒼梧樓
明日もあさつてもある事にして約束　同　蒼梧樓
さし上げてわが子の重さうれしがり　姫島　二竹
をこなしく家賃をこりに婚がくる　同　二竹
骨上げに入歯をしてた事をいひ　大阪　淡水
待つだけを待つて保險屋斷はられ　同　淡水
母今日はいささかなれご酒も呑み　神戸　重陽子
煙突が高うに見へる十二月　同　重陽子

驚ろいた馬二三丁驚ろかせ　不明
電氣局小使室は炭をつぎ　同天
人の前でも憚らず紙幣數へ　同糸
妹は先きに出せぬと斷はられ　同大阪菊路
勘定は勘定として菓子の折　東京寶茶亭
實れ殘る熊手は寒く灯に浮かび　同
冷淡に遠ざかつてるて金を貯め　金澤木偶人
子のために踏みつぶされた虛榮心　同

老人の話寒さを覺ゐしむ　朝鮮東狂子
省みることを知らない喋べりよう　同
國の名をのれんに染めて貯めて居り　長野高峰
たゞ寒いだけでは濟まぬ十二月　同
はつとして見れば肩上げがおりてた　平塚素波
見舞客へは看護婦となりすまし　同
欲しい品思案の内に賣切れる　尼崎萬樂

辨償をすることは口の先ばかり　同
父には勝つが母には勝てず　神戸市公
物賣りを待たし一錢ねだりに來　同
何もかも二つに分けて父は死に　大阪悟空
綿ネルのワイシャツにして汚れてる　鳥取莊一杉
羽子板と共に抱かれる女の子　高知蝸牛

或る詞友に

柳談ほつ〳〵火鉢に炭が割れ　島根不夜城
頼りなき身は面會が羨やまし　螢ヶ池龜甲子
ごうせもう鍍金ばかりの世ぢやないか　岡山笑人
行くまでは少うし寒いスキーマン　堺澤太路
金やればそんな心かと言はれ　金澤風流子
電鐵が景色に見ゐる峰に立ち　神戸松月

温み缺けしは誰の罪にせん　大阪　黒天子
友へ出す手紙一時を聞いて寢る　同　白帆
まつすぐに歸れと父はバスを呉れ　同　文蝶
失業をしてマルクスも讀んで見る　同　山茶花
人生の中ばに立つて職がなし　同　小六
薄給がさせる美談が記事となり　同　田郎
お叩頭する乞食よ俺も病んでゐる　盤ヶ池　瓢簞
抱きあげて見せる夜店の人だかり　京都　秋草
さほる氣は先づ三越へ足を向け　西宮　南窓
松の内雪駄の音も氣持よく　金澤　たし路
人の事務手傳ひすぎてきらわれる　盤ヶ池　波紋
餅もみに不器用そうな手もまじり　同　わたる
看護婦の頭も年の暮を見せ　同　皎月
病院に馴れ死人にもなれるなり　同　光坊
正裝の帽子は妻にさゝげられ　鳥取　佳水
羽織着て桑つむ人のうらやまれ　福岡　不忘
初霰窓を叩いて朝ごなり　金澤　柳月坊
微笑む空に神を感ずる　同　好次
言葉遣ひ云へば家庭の罪にする　丸龜　ゆずらん坊
子が出來た女房店まで口を入れ　堺　清路
賃搗のもう力なうきねを上げ　神戸　柳村
旅役者故郷の夢を見る斗り　大阪　樂鳥
汽車からの軒燈筋を引いて見へ　同　美一郎
戀文を取次ぐやつも惚れて居る　同　丸葉
此傷を語らば古きロマンス　同　桂枝
冷淡に思うてゐたが兄でした　同　柳狂
月が出て半鐘臺が高うなり　同　吐句坊

雜誌だけ包み漏した樣に持ち　同　一舟
首になる話和服でやつて來る　同　豆秋
萬引が下ろされてゆくエレベーター　同　内匠
今更らに苦しい世帶明されず　同　江帆
思ひつかれて淋しい夢ばかり　同　五輪
失業へ誰アれも來ない淋しい日　山　玄々子
里の母暮らしのこゝも聞いて去に　京都　潮多浪
短氣短氣短氣淋しいくせをもち　平塚　城月
一人身に炬燵一ッはぬく過ぎる　大和　翠浪
ごこまでも兄は見下けた顏で居る　尼崎　虛白
戀をしに女の兒をば連れて行く　平塚　美智坊
偏屈にされてはゐれゞ高く居る　大阪　陽喜亭
薄情の樣だがなぜゝ斷られ　同　素萠
筆先をゝめて代書は聞きなほし　同　つばさ
若且那今日も寶惠籠ねだられる　同　俊烈
あかぬけのした都々逸はうたがわれ　同　里十九
晩酌を旨くしたさに畑いぢり　同　鯉友
輕卒が然らしめたゝあきらめる　同　籬楓
さいはいの雪で四日も呑みつづけ　安東縣　花蝶
商賣の口ゝ知りつゝ捨てられず　鳥取　穂波子
桃割が揃ふてかへる花の會　大阪　賀名芽
面會に行けば調練やつてゐる　同　炭車
春がきた人は土ゝも親しんで　同　五笑
死の近き母なるに花はまだ遠し　加古川　五彩果
安く買つた植木今夜に土がいり　大阪　四五磨
初雪の笹へ雀が來てゝまり　同　雪峰

松山支部より

川柳雜誌社松山支部の發會記念句會に出席された麻生路郎先生の來松を出迎へた人々・海南新聞社前にて二月十日の同社寫眞班の撮影・中央路郎先生・その右に柳子先生・左の水樹氏・五健氏・小生・玄々子の右大鷲氏・路郎先生の寫眞は紀元節當日道後公會堂句會の盛況モニンアン姿が路郎先生・松山支部幹事淺井冷々子氏・記事中の（寄稿）

道後二泊（雜感）

八

麻生路郎

欣びに醉ふ

出迎へてくれた四五の人々と共に、神の湯の前の岩井屋に入つた。身體が繩になるんぢやないかと思ふほどぐる〳〵と幾曲りかして三階の奥まつた部屋に通された。部屋には控への間がついてゐた。そこで皆に失敬して丹前に着替へた。

とう〳〵來てしまつた、といふ氣がした。出立の朝まで頭髪は芥川のやうになり髭はのびるにまかせてゐたが、未知の柳友に逢ふのに、これではあまりに無作法だと思つて急いで散髪をした。そしてせつぱ詰つた原稿だけ書きあげてあはただしく飛んで來たのであつた。大阪の忙がしさが、なんだか遠い〳〵ところへ行つてしまつたやうな氣もしたが、それでも明日の句會のことを思ふと、まだこれから一ト仕事あるんだといふ氣が、私を充分につくろがせなかつた。が、感激に充ちた、みんなの眼が私を歡待してくれた。私も大い

にこれに酬ひた。

寡言の二柳子さは、何ンだか談しながら盃の數をかさねてゐた。すべては感激が談し、感激が呑んでゐたのであつた。酒間に短冊や何かゞ持ち出された。筆が紙の上を走つた。それも感激が走つたのであつた。やがて私の意識は朦朧として行つた。醉つたのである。欣びに醉つたのである。

冷々子の印象

私はこゝではじめて會つた人々の第一印象を少しく書いて置きたい。冷々子は謹嚴なうちにもぬかりのない人であることを思はせられた。ぬかりのないといふ意味は人前をうまく立ち廻るといふことではない。謹厳に伴ふ野暮臭さがなく萬事に手落ちがないことを意味するのである。相當の年配者であることも私の意を強くさせた。

この人が今後の松山支部の面倒を見てくれるのだと云ふことを知つて、明日の句會の盛會さも想像された。

五健は見るからに才の人であつた。ウ井ットに富んだ彼の話ッぷりは對手の心を掴まずにはおかぬといふ人であつた。この人が顧問となつて冷々子を援けてくれるといふことは川柳社會化運動のためにも大きな欣びであつた。若々しい大鷲は五健と同じ會社の人であつた。あまり多くを語らなかつたが虎さんといふ名からタイガーといふ號が出て來たところを見ると、あれで滑稽の鳴讃者なのであらう。立々子もあまり多くを話さないが、熱すれば相當に話す人らしい。内に熱を持つて居る人である。水樹は誰とでもよく話すといふ如才のない人であるらしい。他社の支部を持つてゐるために、多少遠慮勝ちな口吻を洩らしてゐたが、私は寧ろそんなことは要らぬ心配だと云つた。大いに盡してあげて下さい。それは一つに川柳のためなのですとも云つた。彼はそれをよく了解したらしかつた。そして隔意なく呑み且つ談じてゐた。

芳之助は酒間に、いつの間にやら來て、誰の軸か知らぬが賛をさせて行つた男である。この町の土産物屋『芳之助號』の主人公であることを宣傳した。色の黑いがッしりとした體軀の持主で、ただの土産物屋の主でないことはすぐに知れた。二十年間伊豫鐵に勤務してゐたことも話して行つた。そして土産物を買うべく約束さゝれた。

温泉の街瞥見

ふと目が醒めると真夜中だつた　醉ふたんだなアと思つた。そして立つ前に、愚妻が『サーマス』を鞄の中に入れ

てくれたことを思ひ出して可笑くなつた。『サーマス』を用意してくれたのはいゝが〈今までに前例のない事」肝心の御本人が醉ッぱらッてしまつては私の鞄の中に『サーマス』がある事を知つてゐるのは『サーマス』自身の外にはないことになる。一體誰に脹ませるために入れてくれたのだらう？と思うと、ウフ、、と一人で、おかしくなつた。私はのこ〳〵と起き上つて、遲まきでも胃を整へるためにやく立たぬことはあるまいと醉醒めの水と一緒に呑み下しておいた。ウト〳〵してゐるうちに　不意に、ドーン、ドーン、ドンドン、ドンドンと太鼓が鳴り出した。ハハア、朝の報らせだなアと思つた。

起き拔に二柳子と養生湯に行つた。湯から出ると三階へ上つて町を見下ろした。温泉街の一部ではあるがすぐ横に社への高い石段が梯子をかけたやうに見ゐるのも風情があつた。家並が温

泉の町らしく少しく爪先上りに曲りくねつてゐるのもうれしい。タオルを持つ手は冷めたかつたが肌には少しも寒さを感じなかつた。

朝餐がすむと二柳子は素人が今朝高濱へ着くので他の人達と一緒に迎ゐに行つた。私は一人でぶら〳〵とそこらを歩いて見た。道後驛から上の方へ登つてゆくと伊佐爾波神社といふのがある。これが湯の三階から見た社らしい。正面の高い石段を登りつめると、そこに羅宇仕替屋のやうな男が荷をおろしてゐた。この社は珍らしく周圍の回廊が全部繪馬堂になつてゐた。四十七士一人々々の繪馬もある。なか〳〵變つた繪馬がある。私は繪馬堂を一巡して川柳の納額はないかと根氣よく見て歩いたが、何れもそれらしいものはなく十七字としては俳句ばかりであつた。

後世、子規を生んだ俳句王國の伊豫としてそれも無理のないことだと思つて諦めて出た。

電燈栽培の見本畑も見た。貸家も見た。公園へも久しぶり、さうだ廿四年振りに行つて見た。ズツとのぼりつめて松山城が遙に見ねるところの高地のロハ臺には三十前後の男女が向ふむきに並んで何事かをさゝやき合つてゐた。私は知らぬふりをして其處を通りぬけて皇太子殿下お手植の松のところへ立ち止つた。見ると皇太子殿下お手植の松といふのが二つある。一つは大正天皇の、一つは今上陛下のお手植の松であることが年代によつて知ることが出來た。私の知つてゐるお手植の松は大正天皇がまだ皇太子殿下でゐらせられたころのもので、見あぐるばかりの大木になつてゐるのに感慨を深くさせられた。廿四年前のことがぼツぼッと私の記憶に蘇つて來たからである。

うれしさはお手植の松と共に生き

こんな句が浮んだ。拙い句ではあるが、私が再遊を記念するためにこゝにかきのこすことをゆるされたい。

升さんと短冊

宿の板塀が何か書いてくれと云つて雅帖を持つて來た。それには勝田文部大臣秋山大將砂田代議士の如き所謂名士から文士、畫家、俳人等のお歴々がずらりと並んでゐた。それ等の人々が心おきなく書いたものだけに、何れもすぐれていゝものばかりであつた。短冊なども澤山持つてゐた『これは升さんのです』

こいひながら一枚の短冊を見せてくれた。それには短歌一首が美事にしたためられてゐた。升さんとは正岡子規のことである。外では升さんなどゝいふ親しみのある言葉では呼ばれないが、流石は子規の鄕國であると思つた。

句會の片鱗

句會は道後の公會堂で開かれた。句の披講が濟んでから私は『子規について川柳を語る』を談した。私はそれを、もう一度こゝで繰返さうとは思はないが、子規の俳句について云々したのでもなく、俳句と川柳を比較したのでもなく、子規のあの病苦と惡闘しつゝ、僅に病床六尺の天地にあつて、短歌の革新、俳句の革新、寫生文の創始等に費やした革命的生命力に論及し、謳歌し而して新川柳の樹立とその宣傳に奔命せる私の立場、川柳雜誌の使命、新しい川柳家の行くべき道について語り、且つその覺悟にさゐも及んだ。尤もこれは席上の人々に語るといふよりも、私自身に語り、私自身を勵まし私自身の微力を罵しつた語でもあつたのであるにもかゝわらず多くの柳友は眞面目に熱心に聽いてくれた。私はその時のよろこびを、もう一度こゝで述べて置きたい。この稿を結ぶに當つて海南新聞社の石井主筆の好意、會場に於ける各委員の御盡力、盛なる歡迎宴をお開き下さつた方々、私達一行の送迎のために多くの時間をお割き下さつた方々の御厚誼に對して深謝いたします。

我觀川柳（二）

＝明るい川柳の諸要素＝

三好革郎

十七音字の短詩型

『川柳は人生詩であり、社會詩であるといふ定義を下した。そして川柳の對照物卽ち材料となる人生及び社會の種々相を明暗の二方面に分けて、この兩方面を詩化されたものが川柳であるとと前號に於て概說して置いた。然らばその人生及び社會、此世の中の森羅萬象中の如何なる事物及び現象が川柳の材料となるか。換言すれば川柳の要素とは何ぞやと云ふ根本問題に觸れねばならぬ事になる。

此世の中には多數の動植物が存在してゐるが、その中で取つて以て我々の食膳に上すことが出來るものは、僅々二百餘種に過ぎないさうである。此ごの植物を食べれば營養になるか、ごの動物の肉は味がよいかと云ふ問題は、美味と營養の二兩方面から觀察して決定されるやうに、川柳は森羅萬象を唯心的方面と唯物的方面の二方面に分けて主觀的に觀、又客觀的に眺めて明るい一面と暗い半面の二面から川柳となるべき要素を含むものを發見して、之を材料として、文字を借りて十七音字の短詩型で表現したものが川柳である。（武玉川の如き十四音字型もあり字足らず、字剩りは例外としてあるが、そのリズムは五七五、五五七、七五五の如く十七音字型のリズムに合致する必要がある）。

川柳の要素

川柳の要素を唯心、唯物の二方面に分けるよりも、その材料の明暗の二面に分類して明るい方面に含まれる川柳的要素、及び暗い方面から發見出來る川柳の要素と二つの方面から眺めることが一番當を得て居ると考へる。

川柳雜誌第四卷第一號より連載された田中辰次氏の『川柳の本質』の稿の中には主として川柳の明るい方面に含まれた要素を說かれてあつた。然し私は田中氏の言はれる『明るさ、輕さ滑稽、諷刺、皮肉、うがち』なごが川柳の要素の凡てではないと思つてゐる。私は明るい方面に含まれた川柳の要素として、

左の各要素を擧げたいと思ふ。（暗い方面の川柳の要素は次に廻すことゝする）

一、笑ひを催ほす要素

イ、ユーモアを感じること
ロ、嬉しさを覺へること
ハ、善こびに滿ちたこと
ニ、面白く感じること

二、樂しさを覺へる要素

イ、幸福に感じること
ロ、愛を感じること
ハ、朗らかな氣持になること
ニ、豐かな感情を抱くこと
ホ、惠まれてゐると感じること

三、諷刺皮肉を言ひたくなる要素

イ、不釣合なこと
ロ、得意になつてゐること
ハ、奢侈贅澤なこと
ニ、權力を振廻すこと

右の三要素の中の一又は二以上を含んで居れば、それが明るい川柳の材料となるのであつて、この要素を發見する作者の態度如何が川柳作家として重大な根本要點であり、又川柳を觀賞する者にとつても亦見脫すことの出來ない重要點である。

右の諸要素に簡單な解說を加へ、その要素を古川柳家は如何に表現してゐるか、現代の川柳家は如何に川柳化してゐるかを述べたい。

ユーモラスな事　笑ふといふことは嬉しい時、樂しい時に限る。その笑ひが起きるのは、我々の意表に出たことが起きた場合に多い、例へば鹿爪らしい顏をして皆んなに難しい話をしてる時にその人が放屁一番ブーッと大きな奴を發射した時などはどんな者でも笑はざるを得ない。これは意表に出たからで

汝等は何を笑ふと隣居の屁　（古　句）

と云ふ句さへある。これは下の下のユーモラスでユーモアももつと上等になると、小さんの落語のやうに、外へ出て下駄を履いて家へ歸つてから、クスリと腋の下で笑ふやうなユーモアとなる。

呑ます氣でゐるに資本家ののしられ　路郎
さて呑むとなれば資本家先に醉ひ　同

これなどは所謂悲慘なる滑稽であるが階級意識がチャンと出てゐて、可成りユーモラスな現代の社會相を攫んでゐるではないか。

巴燒　五十錢　がにうろたへる　かほる

寫生句ではあるが、巴燒屋が意外な大註文にうろたへてゐる樣がよく出てゐる。綺麗でそして多分のユーモアが含んでゐると思ふ。こうしたユーモラスな材料はよく注意して居れば隨分我々の前に轉がつてゐるユーモアに富んだ句を左に少し列べる

抱いた子に叩かせて見る惚れた人　（古　句）
下駄さげて通る大家の枕もと　（古　句）
くどかれて娘は猫と物を言ひ　（古句）
下女眞面目出まして留守で居りません　（古句）
鉢卷で女房へ願ふむかひ酒　（古　句）
羊羹のことでもめてる老夫婦　路郎
二次會に裏章尊さく藏われる　鳴穗堂
玩具屋の虎だけ首を振てゐる　二柳子
貧乏になれてお金が邪魔になり　素人
駄目押せば解に代る生返事　東洋鬼

（以下次號）

川柳塔

○　松盛琴人

御陵前巡査つまらなさそうに立ち
毬唄へ姉は十ほごよけいつき
年玉へお辭儀をさせてから渡し
番頭は丁稚と寢るがいやになり

友人林氏愛兒の死去（二句）

一瞥浮世にあきれ左樣なら
皆よつて可愛々々棺へ入れ

○　酒井駒人

繃帶をした御聞きゝ譯をいひ
病室はめし食ふだけに妻は立ち
雪になるらしい炬燵のあたゝかみ
雪降らば喜こぶわが子病みつゞけ

○　岩本素人

人の死んだ海とは見へず灯を映し
會ふ人に逢へずみぞれのしきりなり

○　西本三笑

同じ水濁つてをれば重たさう
鼻をかむときだけ我を忘れられ
雪降れば酸漿程に灯の見わて
病人が時刻たずねて何んになる
醫者へやるつもりで貯めた金でなし
感激を下駄まで知つてゐるもの
一合でも二合でも一桝でも醉へる
靈魂の煙とならぬ淋しさよ

◇金庫据ゑるに親且那日を撰び　岩崎柳路
洋行の不良モナコで白ばくれ　三好革郎

◇眞劍になればなるほど笑はれる
取れる金言ひ出し得ずに質を置き
疑がへば俺の頭もひとのもの　安井ろひし

◇妻の顔部屋いつぱいにをしせまり
落語きいても笑へない妻　橋本二柳子

道後溫泉（四句）

◇切炭に道後の話あたゝかし
情話一つ道後の湯にも出來
宿にゐても道後の湯が勾ひ
養生で來たのでないが道後にゐる

別府溫泉（三句）

湯煙りの中に大佛隱れたり
紺碧の湯にあこがれる海地獄
汐風に砂湯もよろし旅の人　淺井冷々子

◇もう馬鹿な灯を見ゐ出して四十過
ごん底の世や買つて置け〳〵
叩かれて嬉しくもない年になり
金時計また一ど寢入り雨の宿
廣い庭見て相談が纏まらず
ちと罪な種も殘して榮轉し　長谷川一徹

◇成り上り年賀はもらうだけとなり
俗物に使はれて居る玄關子
死期近き腕に時計の狂はず居
こゝへ迄飲みに來るかとうれしがり　中澤濁水

◇久振り見ゐぬ女給は國へ去に
鬚剃つて着物を出す間包む金
宿直室目刺を買つて燻らせる
怒髮天を衝くが如くにモボは起き
大仕事らしくピンポン汗をかき　詫間三猿堂

◇年頃もありましたよと嫁さぬ姉
やけ酒も呑めぬ養子のおとなしさ
親娘かとおもやさうでもないらしい　楊井二南

就職難（二句）

就職の話に砂糖溶けてゐる
就職の話を逃げる飯を急き　島田翠峯

◇はつきりと義理を守つて生きてゐる
おばけなぞ結ふて出戻り氣にかけず
老舗屋の門で煙草の立ち消へる　牧田普門

○施療受けても主家を忘れず
浮かばれぬ身に初夢を大切がり　中見光路

○裏長屋まもる稲荷も痩せたまふ
子をつれて天神橋や川蒸汽

改札へ妻々々の傘が待ち
言ひ込めてまだ言ひたげな妻　水谷　鮎美

◇かき餅を焼くひまのある親ごゝろ
母のまへ臥てゐてあれもこれも要る
まごころすぱいぷをくわへて金を笑へり　伊藤緑之助

◇ませたなと言へば小鼻をちとゆがめ
風邪に臥す（三句）
發熱にちゞこまつたる股火鉢
風邪四日密柑の數に飽きて來る
子供等の智慧の數々寢てあれば
阪妻を語り巡査のまだ若く　住田亂耽

◇粗忽と言へばうちの息子も粗忽なり
玉を撞くことをうす〳〵母感じ
夢まろく翡翠の玉に住む女
罪の子を誰がこゝ迄育て來し
正月の鼻筋白きいいなづけ
麻雀の形勢悪く炭をつぎ
剃刀の角度うかつな血が滲み
爭議からこつちを姉の家に居る
校内十景（二句）
生徒みな冬の校舎へ吸ひ込まれ
外套の肩が重苦しきノート
逢ふことの悲しくなりし海の戀
靴墨に若さを逃すまいとして
女中部屋鋏が冬の音で落ち

赤帽と白帽戀の年でなし
店番のつれ〴〵懐爐灰をかへ　桑原京郎

◇貧乏の痛快味あり鷹の爪
單純な頭腦で米の値なぎゝ
相性が肝腎ごすと楊で掻き
人格を無視してパイプつまる也
初天神所見（一句）
賣るごころか露店潰れさうになり
借りてきた百圓紙幣は皺が無し
丸やき屋待つた〳〵の三時也
暗い灯の下で鰯の焼けてゐる　松丘町二

◇しつかりと愁ひを利かす顔になり
不良がるこゝが得意の彼女です
安全剃刀の刃の捨てごころ　朝田新水

◇共に働らく女房のうす汚れ
先祖代々名もわからずにゐる
春近く頭痛勝なる針仕事
うまいものだと信じてる牛肉
着飾つてからの女に珠數がいる
歳をかくすに髭の大きさ
惚れられた事ばつかりを云ふも癖　石川双葉子

酒豪の父死す（十一月十二日朝）五句
死なばよし酒で死なばと父は呑み

五十餘の父をうばひし酒の味
悔みに來てる父の呑み連れ
一七日念佛講へ兒のはしやぎ
父の死後只變はらぬは酒の味
愛の巢を訪へば宵からしめてゐる
社長から來るは督勵ばかりなり
歸朝者に事務系統を變へられる

中島鐵洲

◇

平均にならうと水のあせりよう
未亡人男に欲しい度胸なり
勘定と云へば女給は酌いで立ち
取次を賴むと云ふがそも弱身
ほめられて煙突塗は淋しさう

六角桂風

◇

點字なぞ習ひ眼の事忘れて居

水田黄彩

◇

俺のよりみんな立派な見舞品
鍬をすてはるゞいまの出前持

母病篤し

死をのぞむ母へ默つてりんごむく

伊藤愚陀

◇

情熱の戀のと火鉢火が起り

卒業近し

振りむけば夢多かりし運動場

粒々集

八尾　福田山雨樓

熱は下れど金ばかりいる
簞笥の角の鋭ごさに盡く
往診の月の野道をすれ違ひ
鐘のひゞきの中に鷄なく
茶碗の丸さたのしみに滿つ

御影　長崎柳秀

宿直を繰り延べて待つ妻の產
洋服は背中の蚤を持て餘し
蚤を取る猿を眺める麗らかさ
妻楊枝壁にもたれて三味を聞き
二階借り土藏の壁を暑く見る
卒業の名簿に見ぬ姓になり
兒の喧嘩親は末子の肩を持ち
女房の手で揮發油と小さく書き
大臣の顏は漫畫で見る許り

金澤　安川久流美

門附の三味が暖簾をさいてゐる

東京　富士野鞍馬

夜行汽車降りれば此處も積つてる
京へ來て障子大きいものに見る
隱居所に電燈もつかず達者らし
お勝手へ降りる娘は水をのみ
水菓子の剝いてくれるを待ち切れず
錢湯でハッキリ跋見直され
信心の外に子供を抱いて來る

月評（前號）

路郎　紋太
素人　ひろし

近作柳樽　ひろし提出

寢ころべば浮世も横になつて見え

晃　卓

ひろし……ノンキさうな主人公が、よく出てゐてユーモア味のある面白い句だと思ふ。叙法も内容によく適つてゐる。

素人……此句を見ると、一寸ノンキさうに見ゐるが、僕はノンキだとは思はない「寢ころべば」とあるからころりんと横にころがつて浮世を眺めれば「浮世が横になつて見ゐ」ると云ふところに、一面に浮世に對する、或る不滿を物語つてゐるのではないか、寢ころんだのは、疲勞して寢ころんだように受取れるひろし……不滿はないと思ふ、然し皮肉なところはある　浮世でアクセクしてゐる人達を嘲笑してゐる樣な氣持があると思ふ。

路郎……素人君の説で大体を盡くしてゐる、「寢ころべば」といふ言葉の中に、實はノンキでない分子が含まれてゐる。それは下の句に依つて知られると思ふ。自分の實際的才能が十分に出し切れず、又認められず、そこに人生意の如くならざる事を「浮世も横になつて見ゐ」の齣で表現した輕るい皮肉味の勝つた句だと云ふことが出來る、技巧的な叙法も巧いし、新しい川柳の一つとして推稱することが出來ると思ふ。

素人……一見ひろし氏の説の樣に見ゐるが「寢ころべば」は建築物や壁が横になつて見ゐたといふやうな形の上のことを言つてゐるのではなく、作者の心に映じた浮世の姿が横に見えたといふ心の上の問題を句にされたものと思ふ。

ひろし……主人公はそんなに世の中でアクセク働らいてゐる人とは思へない。皮肉に世の中を見てゐる人で、眞正面から世の中を見す立場を換へて見れば此の浮世も面白い所ではないかといふ樣なことを云つてゐるのではないかと思ふ。つまり正面から見れば浮世は住みにくいが、横になつて側面から見れば、そんなにアクセクしなくつてもよいものではないかといふ主人公の氣持ではないかと思ふ。

路郎……兎に角僕は素人君の説なり、その理由に同感である。

素人……次の句の「冬の木となつて熟柿が一つある」を列べて考へたい。

素人提出

逢ふて來た今日一日の帶を解く

テルホ

素人……非常に若い人の戀がよく出てゐると思ふ。

路郎……「帶を解く」でやるせなさも出てゐませんか。

素人　或る緊張した氣分から開放されたやうな氣持が出てゐる。

路郎……緊張味がドカツと開放されて、一種のやるせなさが迫つて來てゐる　その場の情景が出てゐる。

素人……一日の勤めから歸つて來てやれ〳〵と「帶をとく」帶を解くではなく、歡樂の後の哀傷といつた氣持の「帶を解く」だと思ふそれから此戀はまだ肉にわたつてゐない戀、ホン生ぶな戀といふ事が窺はれる。

路郎……先刻素人君の言はれた氣持は出てゐるとは思ふが句としての新一味といふ點から見るとそれほどに優れた句として推稱は出來ない。と云つて決して拙いといふ意味ではない。只自分の境地を縫ふて一つの連鎖

として殘して置く句、卽ち佳いとか。拙いとかいふ意味から放れて此句を作者が殘して置くといふ程度の句であると思ふ。同じ作者の句で「知りもせず酒もやめさすつもりらし」といふ句があるが、此句の方に、もつと複雜さも表はれてゐて句としては、私は此句を推稱したいと思ふ。

素人……句の價値論からいけば同感です。

ひろし……松郎氏の句に「逢ふて戻つて父母に手をつく」といふ句があつた。戀の句は誰しも同じ事を感じると見ゐて、多喜女女史の句などにもこうした境地の句は多い。それらの句と比べて此句が優れてゐるとは思へない。だから路郎主幹の說かれた通りに違ひない。此句を讀み下して「今日一日の」といふのが何だか耳ざわりの樣な氣もするが或はこれが此句の生命かも分らぬ。

素人……松郎氏の句、多喜女女史の句といはれたのは「逢ふて來たのに母寒からう寒からう」を指されるのではないかと思ふ。それなどはうちの人達は自分の戀を知らぬ、逢ふて來たのを知らぬといふ、そのユーモアを捕へた句だらうと思ふ。その點に於いては此句は大分違ふと思ふ、類句として取扱ふべきものではないと思ふ(此時紋太氏出席)

路郎提出

むかし〳〵或るところにと編んでゐる　しかぢ

路郎……一寸此句を讀むと從來の川柳を川柳として見てゐる人達には、物足らないかも知れないし、又新しい人々には何だか輕過ぎる嫌ひがあるかも知れないが、私は詩としての潤ほひ、輕るさ、朗らかさがよく出てゐて大變面白い句だと思つてゐる。母性愛も出てゐるし、其場の情景もよく出てゐるし、調子としても、叙法としても可成調和されてゐて、こういふお伽話式な境地を巧く川柳化した手腕に敬服してゐる。

紋太……大体路郎氏の說に同感するが、始めのお言葉の「今までの川柳を川柳として見てゐる人達には物足らないかも知れない」といふ點は私は反對に感じる。「編んでゐる」といふ下五は今までの川柳の常套的な手法である樣に私には感じられる。從つて何處かにでなく、下五又は句の全部の感じが、拵へた跡が見えはしないかと思ふ。それだけが惜しまれるが、大体の批評は路郎氏と同感である。

素人……お二人のお說で凡て盡くしてゐる樣に思ふが、餘り技巧の勝過ぎた句の樣に思はれてならぬ。優れた句は優れた句だとは思ふが……

ひろし……句体が一寸珍しいんで興味を惹かれるけれども……

紋太……僕は珍しくないと思ふ。

ひろし……ただ珍しい、それだけのことではないかといふ樣な氣がする。

路郎……此位の技巧といふものを技巧が勝つてゐるとか、何とか言つて排斥するのは當らない。只技巧によつて臭味が出て來たり技巧によつて如何にも誇張してゐると感じられる時には技巧の難を言ひたいが、此句などは全く内容に相應しい技巧を用ひてゐるから一向技巧に對する嫌味も反感も起つて來ないと思ふ。

素人……僕の技巧が勝過ぎてゐると云ふのは餘りにスラ〳〵としてゐるので、所謂缺點のない淋しみ、完全過ぎた不完全の意味で、自分の側を通つて行く美しい女を見る樣な氣がする。甚だ主觀的な批評ではあるが……

紋太……僕が技巧の臭味を少しでも感じる理由は「むかし〳〵或るところに」といふ言葉がお伽話であるといふ事を外面的に示し過ぎてゐると思ふ點からで、それよりもモツと實際的な事實に出會しさうな言葉が使つてあればさうは感じなかつたらうと思ふ。殊に下五は餘り樂過ぎる。そうはいふものゝ感情豐かに朗らかなといふ樣な感じは十分に受取れる。

素人……難しいとこやね、なか〳〵。

路郎……「むかし〳〵或るところにと」といふ齣と下五の「編んでゐる」といふ齣とを別々に放して考へて見ると、それらの言葉は或る豊かな内容を描き出すには餘りに貧弱な言葉であるが、此の二つの齣が結び付いた時に全く一つの情景が浮び出し、その中の母と子、などの行動までがハツキリしてくるに至つてはこれは單なる技巧から生れた句といふ事は出來ない。そこを作者の爲めに買つてあげたいと思ふ。

路郎提出

竹藪の風ははっきり吹いてゐる　志郎

路郎……寫生句であつて、而かも單なる寫生句でなく自分の心持の動きがそこに吹い

てゐるのを面白く思ふが、諸君はどうです。

素人……一見寫生句の樣に見ゐるが、竹藪といふものは他の場所で風が吹いた時よりも騷がしいもので、他には風が吹いてゐるか居ないか分らない位の風でも竹藪が鳴ることによつて、風を知ることが出來る。單なるさういふことをいふために此句は作られたものではないと思ふ。

ひろし……「ハツキリ」はハツキリしすぎて感心しないやうに思ふがどうですか？

路郎……僕は「ハツキリ」で此句が生きてゐるのだと思つてゐる。兎に角變つた句の一つに算へたいと思つてゐる。

ひろし……僕は「ハツキリ」といふ樣な、言葉は確然として居るが、この言葉を使ふに漠然とした氣持で竹藪の風を見て居られると思ふので感心しない。もつと心の中から叫ぶ樣な氣持が欲しい。

紋太……兎に角説明体の句であつて、説明された感じが薄くてしつかりとした句にしてゐると思ふ。此句を讀むと何となく淋しい感じや逝いては人生の事などを思はせられる所がある。作者は案外一寸した見付け所を捕へたのかも知れないし、又深く感じで一句にしたのかも知れないが、説明的な感じが薄く覺へる點だけを惜しんで私も佳句の部に入れたいと思ふ。

素人……私が單なる寫生句でないと思ふたのは「ハツキリ」にある。假に「竹藪の風はザワ〳〵吹いてゐる」だつたら寫生句なんですそれでつまり「川柳はいふまでもなく、或る事物に自分の生命なり、感情なりを託すにある」んですその意味から此句からは或る複雜な感情を見出すことが出來ると思ふ。

紋太提出

蛙ふくれるな埋めてかへすよ

石竹

紋太……此句を始めて讀んだ時に私はハツとした。どういふ意味かといふと寛容とか、一茶とかに匹適しそうな程度の人物に出會した樣な感じがしたからです。その心持が偉大な感じを與へます。只默つて此句を私は暗誦したいと思ふ。ところが次の句の「からすですサツサ鉢卷お取りなさい」といふ句を續いて讀んだ時に、前の句が幾らか割引された樣に感じました。こういふ句体は餘りのべつに出る心持のものではないと思ふからです。然し讀み返して前句に對する尊敬は矢張り元の如くに歸つて參りました。

素人……此作家は立派な詩の持主であつて、川柳といふものについて、近頃眞劍に考へてゐられるらしい、そして今自分は或る岐路に立つた惱みを持つてゐるらしい。此間僕の所へ手紙を寄越されて、どうも近頃の川柳はあきたらない。自分の句もテンと分らぬ。これからどういふ方向に向つて行つたらよいか、自分の句を引合して教へて貰ひたいと言つて來られた。それで僕の樣な無力な者が輕々しく批評する事は、重大な責任を感じるためにその儘に返事も出さずにいてある始末なんです「蛙ふくれるな埋めてかへすよ」の句については未完成ではあるが、恐ろしい發達力を含んでゐるやうに思はれる。

ひろし……冬籠の庭を掘るとか、田圃を鋤きかゑすとかしてゐると、冬ごもりをしてゐる蛙が掘り返へされて、ぷつとお腹を膨らす所を「埋めてかゑすよ」と一個の蛙に對する深い作者の同情が出てゐて重厚な作者を見るやうな氣がする。次の句の「からすですサツサ鉢卷おとりなさい」といふ句は、八々の「カラス」の場合の樣に取る人が無いでもなからう。然し恐らく此の作者はそんな事を冰む人でもないからもつと意味ある句だらうと思ふ。

路郎……大分此作者の句境が問題になつた樣であるが、句の方面に觸れる前に、此の作者に就いて少しく述べて置きたいと思ふ。此作者は元「案山子」と言つて今の梅田支部のグループの一人である。案山子時代の句はどちらかと言へば月並な句が多かつた。所が或る期間案山子の名を見なくなつたので どうしたのであらうと思つてゐると、卷紙の切つ端しに可成り優れた句を書いて「石竹」といふ作家が現はれて來た。此作家の句を見てゐると、生活方面に又家庭の人事問題の上に非常な惱みを持つてゐる事を思はされてゐた。或時その石竹君に會つて、最近の句から君の心境の變り方に就いて話したところが、彼は案山子時代に持つてゐた 川柳境が全くつまらない事、又最近の自分の心境がスツカリ變つたことについて話してこれで良いのであらうかといふ樣な事を聞いてゐた。僕はその時に君の句の進境に實は驚いてゐたのであるし、勿論その調子で進んで行かれたらよからう、句が變つたと 同時に字までが巧くな

つたといふ樣なことまで話して笑つたことがある。最近に至つて益々句境は進んで來た突き進んだ人情味が、動物愛にまで及んで來て、人間と動物とに同じ樣な感情が働らくやうになり、先刻紋太氏が言はれた樣に眞寫或は一茶の境地へ出て來たんだと思へる程全く他の人達と違つた道を歩いてゐる作家だと思ふ。近くは大正俳人の中に「菫哉」といふ人がある。その作家も川柳を作つたことがあるが菫哉の俳句に「水が流れる蛙ひとりふたりさんにんよにん」といふ句があつた。其句と此の石竹君の「蛙ふくれるな埋めてかへすよ」などを比較して見ると、句意は勿論異ふけれども動物に對する自分の心の働き方などが非常に近似してゐると思ふ。此の作者などは外に超然と言はうか、ぼう然と言はうか瓢逸な態度と言はうか、物に拘泥せぬ樣に見ゐてゐて、而かも内に非常な熱を持つた民衆詩人とも言ふべき人だと思つてゐる。蛙の句に就いては全く敬服してゐるが、これから此の作者の行くべき道が何處にあるか、何處へ行くかは最も興味の深いものであつて私達が何處へ行き、何處へ行くべきものだといふべき性質のものではないと思ふ。只歩み方によつては非常に危險な方面へ行つて了ひはしないかといふ事は考へられぬこともないが、それも只さう思ふだけで、その作者の精進によつて我々の計り知られない良い境地へ出られるのかも知れない。それから紋太氏が次の「からすですサツサ鉢卷おとりなさい」の句を讀んだ時にこういふ句体の句が續いて出ると前の句の價値が些か割引される樣に言はれたが、此作者の句が三句拔けてゐるけれども投句數は十餘句からあつたので、句体としてはどれも同じ樣なものでなかつたから、それが私には目立たなかつた。だから常套的にさういふ句体が羅列されたものでないことも作者の爲めに言つてをきたい。「からすですサツサ鉢卷おとりなさい」といふのも勿論花札の場面ではないと思ふ。所謂擬人的に烏が人間へ話しかけてゐるので、朝早くから野良へ出て終日汗にまみれて働らいてゐる人々に私ももう夕方になつたので塒に歸ります。サアあなた方も鉢卷をとつて早く家へ歸つてお休みなさいと、烏を借りて來て百姓の勞苦を稽らい、且つ同情した意味だと思ふ。

川柳塔　紋太提出

二階など貸そかと女房云ふてくれ

鐵洲

紋太……こんな輕い氣持の句も好きです。夫婦仲の情味、よいおカミさんの持つた溫かさ、さういふものが泌々と感ぜられて「君も困つたんのか」と肩でも叩きたい樣な和やかな心持になります。

ひろし……紋太氏の評は言ひ盡くし得て妙、更に屋上屋を架すの必要を認めません。

素人提出

できすぎた燭にめでたいお元日

二柳子

素人……酒を呑まない小人數の家庭の喜びに滿ちた元日の光景がよく出てゐると思ふ。二柳子君の句は何時も餘り技巧の跡の見ないところに敬服してゐるのである。そして自分一人が喜んで歌つてゐるやうな跡も嬉しいのです。

紋太……「めでたい」と云はずして「めでたさ」を出して欲しいとか餘りにめでたさを出し過ぎてゐるとか言へないこともないが、そうしたことを言ふに及ばぬほど纏つた感じのする句である。如何にもめでたさうではないか。

路郎……先刻素人氏の言はれた批評で盡きてゐると思ふ。大体橋本君の句は地味で重厚で時にはブツキラ棒で而かも底力の有る北國人丸出しの句が多いが、此句などは一寸何時もの句から放れて作者の常態から見ればズツト技巧的に而かもよく纏つた句であると思ふ、極く平凡な境地の樣ではあるが、元日にこうした境地を味んだ句はまだ曾て見たことがないので大變面白く感じた（茅郎記）

川柳漫畫 假の姿（三）

柴路舟郎畫評

坂下へすてられたやうに
馬車屋住み

琴人

山紫水明の一寒村に…しかも坂下に住みて濁世を知らず、よしや貧しくとも自然の天恵は馬車屋を捨てざるなり。

たま〳〵密柑の皮、煙草の吹殻屋根に堆きを見る。心して行け、旅人よ。

三十の息子へ水をくんでやり

鹿村

『僕が汲みますよ』

と云つても、なかなかに承引せず、老ひの腰を伸して汲みあげる水の尊さよ。この息子必ずしも親不孝とは断じ難し。

母はいつまでも、子どもを子どもとして扱ひたく、また扱ふて自らあやしまざるなり。世間もこれを問題にせず、母子なればこそ。

密柑山お伽話にある日向

我卵堂

密柑山は明るき南國を象徴す。背後は圓き山もて擁かれ、水は流れて海に出で、かッと射す陽はうらゝかなり、ほがらかなり。

あゝ母の夢がたりこそふさはしき情景ならずや。

菓子折とズボンの皺の損なりし

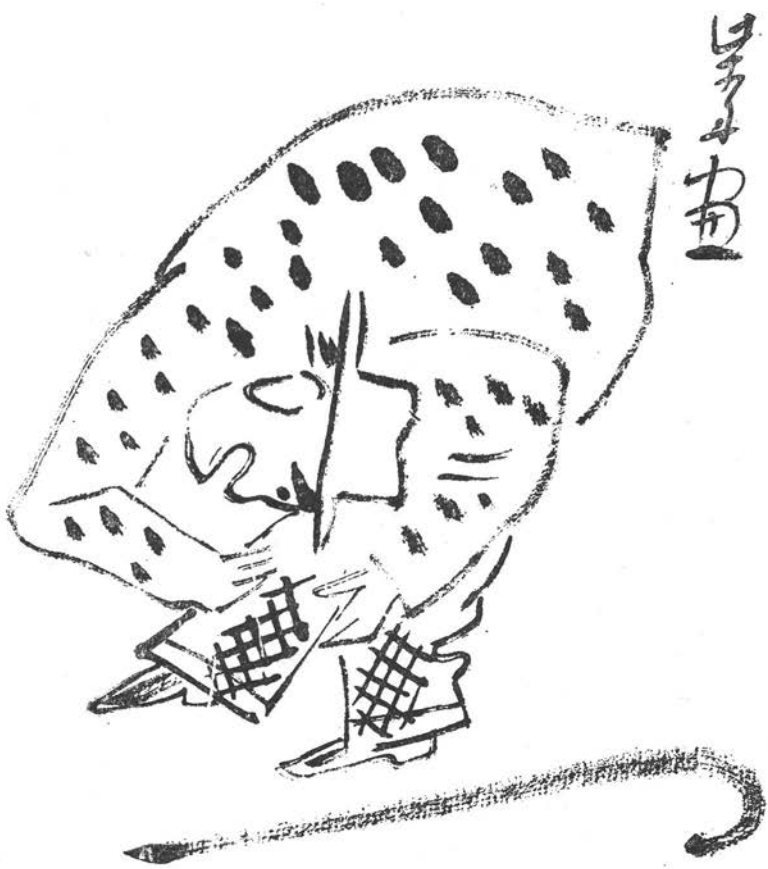
黄彩

履歴書はこれ迂餘曲折波瀾重疊の履歴書なり。されごそこは何ンとかならぬものにもあらざるべしと自らはげまし同郷先輩の門をたゝく。

先づウヤ〳〵しく菓子折を捧呈し、つぶさに最近の窮狀を披瀝して就職口を哀訴歎願す。然りと雖も、その答たるや

『僕の方はさしあたり人は要らぬまア心懸けておかう』

と、アッサリと突き離さる。茫然として門を出づれば際立つて目立つズボンの皺。



生業の古川柳（六）

蛭子省二

（六十六）土筆賣

杉菜。水邊沙地に多し。春舊根より先づ花を生ず。莖高さ數寸、梢に花ありて筆の頭の如し。之をつくぐしといふ。

つくし賣姉はでんがく燒いてゐる
つくし賣小判を出せばにげるなり
小判ではいやだと逃げるつくし賣
愛想に四五對まける土筆賣
つくし賣しやうれにせうと蹴られる
櫻田のやしきから出るつくし賣

（六十七）植木賣

都で菓木の類專ら貴を以て擔之　大樹には不用之、又貴價鉢木の類は御膳籠深きを用ふ。又深さ半なる籠諸戸の專用とす。

大三十日えゝしゆへうると植木賣

（六十八）小松賣

我が春を二本は殘す小松賣

（六十九）芒賣

東都歳事記には、芒を賣りに歩いて居る繪が載つて居る。

なまきすの一日たにぬ芒賣

（七十）枝豆賣

文使ひ枝豆賣とすり違ひ

（七十一）菖蒲賣

時珍曰。菖蒲は蒲の類の昌盛なるもの。故に菖蒲と名くと。端午の爲めに市に賣る。

江戸へ出て泥足をほす菖蒲賣
戰場へよもぎ菖蒲をうつてくる
どろ足の干る頃あやめ賣じまひ

菖蒲賣取立てといふ足でくる
假葬をかついで五月賣つてくる
菖蒲賣どじよう汁とは出來心

（七十二）鏡賣

鏡賣はみじんさいふ菖蒲賣
鏡賣のしきりに通る時あかり

（七十三）菖蒲刀賣

端午の飾刀にて親族出生の男子等に送之木刀也。金銀紙等にて飾之。

黑川道祐曰、端午に用ふる處の木刀或は菖蒲刀といふ。其形の相似たるを以て節物に准へてこれを禰、兒輩腰間に横たへ端午石戰の戯の後に。多くこの刀を以て相戰ふ

これを菖蒲切といふ。

見せすともよいに太刀賣ひらりぬき

因に俳諧歳時記栞草に菖蒲人形。此人形は力士の形を模して作れる多し。江戸にて元祿の頃までは、市中を賣りありきしにや云々と。

其角の句が記してあるが、古句には未だ見出さぬ。

（七十四）から皮賣

からかは、山椒の事。皮刻みて食用こす後代絶ゆと云ふ。

から皮を牛いさかひで亭主買ひ
時鳥からかは賣をあをむかせ

鰹賣の句は略す。

（七十五）帽子賣

袋に、男の頭巾女の帽子、古來よりある事にや。神代のかん頭巾大黒天の如し。年來かむりもの風かはる。

三尺帽子とて木棉にて頬かむりにし、又帶にも用ゆ古へより有り。後に麻にて色々のもやう染たるを三尺手拭と云。元祿より五尺手拭になる。今の腰帶これなり

帽子賣うれひな顔も稀にみる（十三ページ）

（七十六）蚊帳賣

近江の富賈の江戸日本橋一丁目等其他諸坊に出店を構ふ者あり。專ら近江産の疊表蚊帳の類を賣る者也。此店より手代を買人に市街を巡らしむ　輙は雇夫を以て擔也、其扮圖の如く二人の菅笠雇夫の半天及蚊帳を納る、紙帳の箱ともに必ず新製を用ふ。又此雇には專ら美聲の者を擇ぶ。雇夫數日習之て後に爲之賣詞『萌木のかやあ』僅の短語を一唱するの間に大略半町を緩歩す、聲長く呼ぶ事如此也。

蚊帳賣はめりやす程な節をつけ
蚊帳賣はよび出す前に肩をかへ
蚊帳賣は長く紙帳はせはしない
蚊帳賣の聲のいゝのを女房よび
蚊屋賣の聲諸共に日の永さ

寶永の末大阪の天滿喜美太夫といへる者說經淨瑠璃の名人にてありしが、生玉の茶屋にて口論し。これについて江戸に下り名を包みて居れり。一とせ吳服屋蚊屋を賣荷持にやとはれて。萌黃の蚊屋と呼ぶに節を付けて美聲を高くはり上げれば聞く人これをめでて此年蚊屋大に售たり之れ蚊屋賣呼聲の始めなりと云ふ事である。

黃色では呼べぬ萌黃の蚊屋の聲
いゝ聲でぶら〳〵出る暑い事
一町に二張三張蚊屋の聲
聲をうるやうに聞ゐる夏の蚊屋
横町へ折込んでゆく蚊屋の聲

處が羅漢寺勸化の呼聲が蚊賣をつくりであつたらしく。

らかんじは萌黃のかやのやうに呼び

（七十七）煙草賣

三都ともに定扮無之。或は平裸を以て負之。或は拐に掛て擔之也。

「我衣」に貞享年中迄刻多葉粉見世賣計りにて世利うりなし。葉煙草を調へ手前にて刻むなり。然れ共若き女中などの類は、やに深きをきらひ刻みたばこやにて色合きなる和らかなるを調へのみたり元祿年中より刻煙草せり賣出る。箱圖の如し。夫より寶永年中に至て世利箱叮嚀に致す。其後元文年中神田鍋町に叶やと云刻多ばこや出る。十餘人切子をかゝへかつぎ荷六七荷出す。江戸中を賣弘めたり。此時よりかつぎ荷始る。寶曆年中に至てすべて刻たばこや。になひ箱になる

「蘆塚談」に、ガチャ〳〵多葉粉賣の事我等幼手頃は藥簞笥のやうなる箱に引出をつけ引出の中に仕切を入れ二行に刻多葉粉を入れ。蕨拳の鐶を引出し毎につけ肩へかたかけにして賣歩行けり、鐶がガチャ〳〵と鳴るにより其音を聞て呼入かひたるなり、此箱にて商ふ者五十箇年以

前絶ゑたり

お屋敷ばかりでくへますとたばこや
荷は輕く忠義は重き煙草賣
煙草屋はいつちはむきのいゝ間者
れゐさんへはかりの跳れる蕎賣

（七十八）火鉢賣

桐或はけやきの筥火鉢に瓦相、銅相を納れ。大小長短精粗其製種々あり、二貫に積で擔ひ賣る。

直が出來て錢ぶんまける火鉢賣

唐柳短解（終）

（一一〇）おれは孔子と陽虎は二度『當百』で『小判孔子に似た陽虎』で、陽虎の顔が孔子に似て居るところから惡事を働いた。將適陳、過匡、匡人嘗爲陽虎所暴、孔子貌類虎、止之。

髮を直して孔子頼みましょ
陽虎ではござりませぬと陽虎いひ

論語子罕篇の、子畏於匡曰文王既沒、文不東茲乎云々は此の塲合である。

（一一一）八功德水で出合は手諸曲『初雪』に『この念佛の功力に引かれ、忽ち極樂の台生れ、八功德池の汀に遊び、ふかん鷺に翼をならべ……』

无量壽經には、八功德水湛然盈滿、清淨香潔味如甘露とある。卽ち極樂世界には八つの功德ある水の湧く池がある。その功德とは澄淨、清冷、甘美、輕輭、潤澤安和、除患、增益である。

此句は不忍池畔出合茶屋の光景。

（一一二）五十展轉の功力で路次が込み五十雜の句である。法華經隨喜功德品に亦隨喜轉教、如是展轉至第五十と。謠『賴政』に五十展轉の功力だに、成佛まさに疑ひなしの文句取。

又『通盛』に、弘誓深如海、歷劫不思議の奇緣によりて、五十展轉の隨喜功德品實に有り難や此經とある。法華經は一人より他人に、他人より第三者にと傳へ、五十人目に當る人でさへ無量の功力を受けると云ふのである。

川柳書架（冊三）

川柳 波滿句集

大塚三拍子 創編

▽凡例の一節に
一、波紋、指針、遙靑、洗心等に分類して載錄してあるが、只見よいやうにしただけでなく、指針は比喩、轉彩は擬人法遙靑は風景、洗心は氣分、吃顔は笑味、細好は對形、疑聲は思索、寸步は實寫、灯屑は思想をと云つたつもりで分けて見た云々

▽昭和三年十二月一日發行、菊半截一〇一頁、定價金六拾錢、發行所横濱市中區相生町二ノ四九、川柳濱之會

▽句は震災後に生れた柳誌「波滿」四十五號壹萬餘句から六百句を拔いたもの、瀟洒な句集である。

ひぐま（創刊號）函館にひぐま川柳社が創立され、「ひぐま」の創刊號が出た。函館氷原社を除く函館に於ける各川柳社が併合し北海道の大先輩神尾三休氏を盟主として生れたもの、將の發展をのぞむ。

（發行所　函館市新藏前角ひぐま川柳社）

近作

麻生路郎

道後にて（三句）

漱石に子規に道後の湯はあつし

丹前は坊つちやん團子のぞきこみ

緑丸にて別府に向ふ

船を忘れるほど人妻の帶赤く

旅愁

遠く來てあらしの窓に子を思ひ

地獄廻り

龜の井はまたも樂土へ引きもどし

ロンドンを懐ふ（三句）

三周忌今はつかはぬ硯石

ロンドンが歸つて來るか身重也

一路集

（募集句）

足音

前田雀郎選

玄關へ足音荒く濡れて來る　柳川亭
不孝者母だけが知る足の音　かい痴
足音で留守居火鉢へかしこまり　巨水
病室の午後足音が少こし消ゑ　江帆
足音へ嫁の櫻は外される　黒天子
人の來た模樣夕飯ふと默り　雪緒
隣まで來た足音へ手を鳴らし　突支坊
足音までもよく似てる親子なり　潮多浪
足音へつまらなそうに犬あくび　里魚
足音へ犬は忘れぬ顔で出る　好次
足音に縫ふ手をやめて時計を見　忠八
閑の道我が足音を寒う聞き　柳秀
かくれんぼ來る足音へ身がちゞ　俊烈
よく釣れる人へ足音寄つて來る　同
足音に遲くなつたる詫を見せ　銀水
足音をはつきり當てゝ皆笑ひ　折草
足音にいたづらの眼と眼が默り　伴内
足音にまただまされて炭をつぎ　龜甲子
段梯子女うれしい音を立て　ゆうらん
近寄つて來て足音は遠くなり　雨月
片言も聞き足音も聞いてゐる　木偶人
アスファルトもう暮ぶる音になり　たけし
足音が近づいて來る手術臺　白郎
警官の足音を聞く寒い夜　同
足音を先づ先へやる老課長　美智坊
足音をそろ〳〵知つて戀になり　鐵洲
ゴム靴でくる監督をみな嫌ひ　町二
木枯に足音近く遠ふなり　光坊
それらしい足音もせず夜の長さ　秋無草
春の宵月ある方へ足の音　喜由
足音の遠く聞ゐて雪になり　たけし
はつきりと足音立てゝ仲居降り　鬼逸樓

川柳類題索引 (2)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし　越村如香　安井欣女　共編

題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其號の何頁を表はす。例へば結婚二10は第二號（第一卷三月號）第十頁の如し。

（一）人情　風俗、人事、身体

病氣 (2)

K

結婚　二10
曲者　四13
心　四18
戀人　七11
戀　八17
考へる　十12
化粧　十三15
掛取　十三18
金持　十四17
駈落　十九22
歡迎　十九11
工事　廿24
休暇　廿二25
口笛　四13
窮屈　八14
廿一11
五四53
買物　九13
看病　十一9
小男　十九9
四九55
廿五10
卅五24
五四54
四十32
五三50
脚氣　廿三14

ひまらしい巡回巡査靴の音　市公
五　客
足音を寒く炬燵に聞いて寝る　耕民
足音に物干の物思ひ出し　悟空
こつぼりの嬉しさ溝の内や外　光路

咳

子の咳を氣にする母の弱々し　翠峯
應接間主人の咳を遠く聞く　蝸牛
戀人の咳がこの頃氣にかゝり　恒子
歸つて來たのか門のせき拂ひ　雄々
咳拂ひしてから舅襖あけ　愛子
此世をば終りに近い咳になり　鬼逸樓
校長の咳講堂をしんとさせ　萬樂
咳ぐらいかまはずに出る共稼ぎ　竹堂
若い母おろ〳〵させて咳入る子　町二
いゝ聲の出さうにもない咳拂ひ　たけし
兒の咳へ女房は今日も吐られる　龜甲子
死の豫感かすかな咳がつきまと　文蝶
訪ぬれば唯咳だけで病上り　太路
咳の兒を誰が〳〵と抱かゝへ　田郎
二階にて寢苦しいのか父の咳　普天
氣味悪い咳が背中へ突き當り　雨月
子の咳をさほど氣にせぬ男親　樂山人
隣席は絶えず氣になる咳をたし　秋無早
輕い咳窓明けてやる陽のぬくみ　耕民
立聞きをして居たらしい咳拂ひ　青水
足音もさせぬわびしき枕元　鯉友
宿直が一人足音さてゆき城月
(人)足音が二人へ近く遠くなり　孤舟
(地)惚れられて歸へる足音靜かな　新水
(天)詫住居子供が戻る足の音　緑之助

麻生葭乃選

咳入つた兒に母の身の置き處　纖洲
咳拂ひ弓を構へる肌をぬぎ　雪緒
度々の咳へ顔色うかがはれ　波紋
夜つ引いて寢られぬ咳にやせる　南窓
咳拂ひして壇上の水を飲み　たし路
寢たまゝの咳弱々し菜種咲く　光路
日々の咳に痩せゆく吾を見る　しげる
咳こ熱俺の命をこらんとす　湖舟
風邪ひいた日は和服着て咳いて　潮多浪
姑の咳に新妻針にぶり　坊
隱れんぼ悪いところへ咳の出て　一舟
看病にふつと氣になる咳がつき　柳川亭
親の眼をぬすむ煙草の咳拂ひ　丸葉
咳ばかりはづんで寒い〳〵夜　皎月
咳をするたびにあたりへ氣をつか　柳狂
金持の咳奥の間で重みあり　散柳
隣室の咳に朝寢かヤットさめ　柳月坊
咳きながら口を放さぬ卷煙草　突支坊
かげぐちへ來たことは云へず咳拂ひ　巨水

首つり　廿四31
後悔　廿六28
校正　廿七35
腰　廿八16
怪談　廿一17
口癖　廿二33
形見　廿二17
缺損　廿七35
寄附　廿八36
虛榮　廿九44
金歯　四十30
計略　四一11
近所　四一45
國自慢　四一46
唇　四一47
管　四二53
書置　四四51
禁酒　四四53
欠勤　四四53
稽古　四五56
喧嘩　四七42
故郷　四七44
孝行　四七48
恐怖　四七46
覺悟　四八66
滑稽　四九53
かるた　四九57
顔　五〇51
寒稽古　五〇53
幹事　廿六28
風邪　廿七32
苦勞　廿八10
結局　廿九35
拒絶　廿二33
乾盃　廿二34
歸省　廿六62
靴音　廿九47
五〇58
級長　廿九45
火事　四十32
口許　四一43
五七53
公用　四二33
五五55
患者　四三65
希望　四四52
血判　四四57
五六47
見物　四五59
交際　四七46
五七49
五八47
危險　四八66
小遣　四九51
五〇53
聞合せ　四九59
五七54
門松　五〇53

氣にかゝる咳を身重の妻がする　没食子
咳一つだにせぬ默禱の二分間　桂枝
力ない咳に肉身遠ざかり　佳水
病室のもの皆寒く母の咳　伴内
咳聞いた盗人少しのみを止め　清路
女の子袖口で咳押へ付け　吐句坊
局員の咳が聞こゆる電話口　美一郎
咳止めと云ふ飴丁稚食べてゐる　雪峰
満員車隣りの咳を避けて立ち　陽喜亭
第三期淋しく咳いて添乳をし　鯉友
咳拂ひ聞いて丁稚の手が動き　青柳
咳をする子へ母親はじんべ着せ　秀峯
咳拂ひ一つに嫁は落ちつけず　柳秀
姉の年に成つて同じ咳が出る　素萠
裏口に戻れば母の咳がする　新水
あの咳が悪いと叔母は醫者を呼び　琴人
ちと樂になつて數よむほどの咳　桂風
咳込むに下の夫婦の話し聲　卯生
正念場うしろの咳が氣にかかり　賀名芽
視線ただ咳する方へ注がれる　木偶人
重役の咳に社員は振り返り　悟空
咳拂ひさへも課長の威を示し　光坊
咳の出る母へ話を一寸きり　市公
咳止めの飴がもうない枕元　賣茶亭
うたた寝の看護婦咳で眼を覺し　朝陽
いい女咳をショールへかるく受け　美智坊

撮影が濟むと笑や咳になり　冷々子
佳吟
疑へば邪慳にひゞく母の咳　虚白
ラヴシーン咳込む人の美しさ　ひさし
怪し氣な咳にこの世を暗くみる　五輪
湯上りの咳を叱つて床を出し　正春
咳一つするにも心おく身なり　一舟
姑の咳に朝々悔いて起き　柳月坊
弟の咳入る聲に目を覺し　柳村
咳一つ宿直の夜を深めたり　蝸牛
何氣ない咳にも繼子ギョッとする　菊路
涙を呑むで咳にまぎらし　京郎
院長が診て咳藥甘くなり　豆秋
悪所から戻れば母の輕い咳　木偶人
粉藥へ咳がまぢつてむだになり　折草
空咳の哀れ十七八にして　休歩
湯上りの咳に散歩を引きかへし　松月
離れから父の咳して桐一葉　冷々子
咳一つするにも遠慮勝ちな嫁　黑天子
その咳へ少しそり身の聽診器　柳秀
さう聞いてからが氣になる咳拂ひ　同
(人)病妻の咳入るたびに箸を置き　入斗
(人)奉讀が終れば咳の降る如し　蝸牛
(人)咳の出る子にひかされて首の垢　天絲
(地)咳込んで咳込んで病父の怒　町二
(地)もつたいをつけて松王咳(きまげる)　柳秀
(天)祖父の咳もう菊畑廻つてる　假名子

借り　五〇53
買食ひ　五〇59
記念日　五一48
苦笑　五一55
嘘　五二55
急用　五三57
口答へ　五四50
狂人　五四52
苦勞人　五四54
氣樂　五五44
彼女　五七48
感心　五七54
繼文　五八42

片意地　五〇56
空腹　五一53
舊友　五三47
客　五四54
海水浴　五四56
寛ろぎ　五六48
食逃　五七54
聲　五九45

眼　三12
無邪氣　四12
旨　十六14
萬引　十八14
身ノ上　十九12
貰ひ子　廿一16
待ち(ぼけ)　廿一19
祭　廿一20
見送り　廿三11
丸刈　廿12
無口　廿三16
見合　廿九16
無理　四〇32
丸髷　四〇33
漫畫　四二54

M

廿33
娘　五八46
門弟　七16
名人　十七31
廿一14

五七49
五三31
五三49
五四55
四二52
耳打ち　廿八16

五二52
四五51
妙齢　四四59

五七51
五五35
五一54

取次

◇ 素人選

恩人を取次 迂散臭く見る 柳川亭
取次のへまさを詫びて會つて居る 源太夫
警戒の色ありありと取次かず 町二
(佳)舌打ちをして押賣に睨まれる 同
取次の機智それぞれに追返し たけし
(佳)うまい事返し 次煙草吸ひ 文蝶
取次は名前に念に念を押し 悟空
取次の給仕名刺の裏表 風流子
取次の二度目は不承無性なり 東狂子
取次の事でこてんで受入れず 菊路
玄關番取次ぐ迄に眉をよせ 普天
そう言へば解るに取次むつこする 市公
取次は同じ説明繰返し 柳月坊
取次の一向要領得ぬ言葉 波紋
三度來たことを取次覺にてる 幸吉
取次へ勳六等の名刺出し たし路
取次の今日は駄目だをほのめかし 竹堂
取次の顔が變つて斷られ 文蝶
(佳)取次の今度は馴れた奴が出る 琴人
取次は來意をまだるそうに聞き 一風
取次へ見透されまい心にて 鐵洲
取次が入つて腋の汗をふき 南窓
取次はしごろもごろで留守を言ひ 恒子

岩本素人
八木毒仙 共選

取次いでから叱られて留守と言ひ 愛子
取次は主人の居らぬのを困り 風流子
取次は何んにも知らぬ嘘を言ひ 黒天子
駄目だから駄目だと取次に呉れず 好次
みすみすに留守を取次言ひ澁り 突支坊
取次が出て尾を振り出した犬 沒食子
孤兒院へ斷り切れず母座り 伴内
取次の機轉只今留守と言ふ 雪峯
取次に譯を話して寒く待ち 素萠
取次が去つて額の字讀み直し 太路
取次は顔見た丈けで奥へ行き 柳村
高利貸取次なんぞかもて居ず 鯉友
應接へ入れて取次ドアーを締め 桂枝
取次はそんな人とは知らぬなり 皎月
肩書を見て取次は改まり 潮多浪
叱られる譯は取次知らぬ事 光路
取次の女中はそれと知つて居る ひさし
取次が女で勝手チトちがひ 樂山人
御療人になつた言葉で取次し 南窓
取次を賴んで埃拂ふなり 秋無草
取次を待つ間帽子をいじつてる 青水
講義錄ふせて取次立ち上り 光路
取次が出てから犬は木戸で吠ゑ 賣茶亭
取次の後について來は來たが 木偶人

無情 四五54
舞ざらへ 四七45
迷子 四八65
眼鏡 四八66 五八44
見舞 五一51
待つ 五一54 五二50
眉 五四49
見ほからひ 五五58
持ち前 五七52
夢中 五九50
土産

N

仲人 一16
荷造り 九10
逃げ腰 廿一10
呑み直し 卅四36
寢顔 卅六50
二階借り 卅六61
入學 卅九43
入學試驗 四一45
呑氣 四四54
人氣 四七47
涙 五二51
泣く 五三53
長生き 五四53
寢言 五七53

O

女の子 二5

迷惑 四六53
眞似 四八64 五八49
五〇58 五三54 五四54
餅つき 四九59 五四53
身の上 五一56
負け惜み 五三4
無駄 五五57
未亡人 五六43
モダンシガール 五八49

廿三12 四五57
慰め 十六13
納札 廿二22
馴染 卅五33
投挿し 卅七35
五〇52
內證 四〇32
生 四一45
五三52
札 四八64
生入 五三50
醉 五八45
內心 五五55

取次の書生も同じ國訛り　一舟
取次いで貰ふにかなり骨が折れ　巨水
(佳)懷手して取次の居候　朝陽
取次へ悔みを言うて歸るなり　翠峰
取次の消ゐた室から金屏風　松月
取次の後ろに衿を搔き合せ　蝸牛
取次の小僧大事に賴まれる　南金坊
取次がはいり身なりをチト直し　光坊
取次を待つ間に靴のジャズバンド　散柳
取次は文箱と頭振つて行き　晴二郎
取次が出て來たらしい足の音　雨月
取次に活潑に出る男の子　新水
來客に取次たのむ忙しさ　小六
玄關へ濡手のままで改り　伴内
前掛で手をふきながら内儀出る　桂水
取次に出る妻乳房入れて立ち　沒食子
取次のいそいそとして女客　たけし
取次にやつと出たのはおさんどん　清路
外人が來て取次は困り切り　吐句坊
取次を待たせて置いて何か書き　小柳枝
嫁が出て店の値段を奥へ聞き　雪緒
取次にしては話がよく解り　菊路
御主人の在否を聞けば私です　耕民
仲のよさ取次手持無沙汰なり　一風
取次の女中の顔が赤くなり　波紋
取次いでやると女將はおごらず氣　しげる
(佳)炊事場へ困つた人を取次がれ　鬼逸樓
取次いでやると言へた惚れて居る　京郎
取次いで渡す鏡に指の型　萬樂
取次いだばつかり同じ罪に墜ち　菊路
取次いだ祟りで下女にお暇が出　天絲
取次は不在をぐつと睨まれる　湖舟
支那人が取次に出て氣味惡し　勇宗
取次の電話へ返事困つてる　賀名芽
取次で呉れた電話がもの足らず　田郎
(佳)お取次ぎして丈けと揉み手なり　折草
保險屋に取次うまく丸められ　美智坊
ふためいて居るへ取次冷やかに　陽喜亭
取次の子供がませた口を利き　同
叱られて來て取次は聲を替へ　美一郎
取次に出た子が土産貰つて居　小六
あり丈けの手が取次へ伸ばされる　冷々子
靈藥に生きて取次繪看板　龜甲子
虎の威を借る取次の横柄さ　テルホ
取次がかしこまつてる初王手

◇　毒仙選

取次いで呉れた電話はものたらず　賀名芽
取次も待たずうちかと上り込み　耕民
いま〳〵しさうに取次先きと立ち　柳川亭
取次は數だけよんで積み重ね　柳月坊
取次の無愛笑つて濟すなり　柳水
取次の愛想に暫し待つときめ　松月

唖者　六13
白粉　八20
大男　卅九19　卅四17
女　四三53
臆病　四六50
思ひ出　四八66
女客　四九54
大人　五一39
大入　五二54
お茶ひき　五五51
恩　五六49
お多福　五九51
男親

P

パトロン　五六46

R

落藉　十10
流行　廿二22
悠氣　廿四30
諒闇　卅七36
旅行　四一45
浪人　四二52
臨月　四六53
露骨　四八69
理屈　五六48
留守　五七50

S

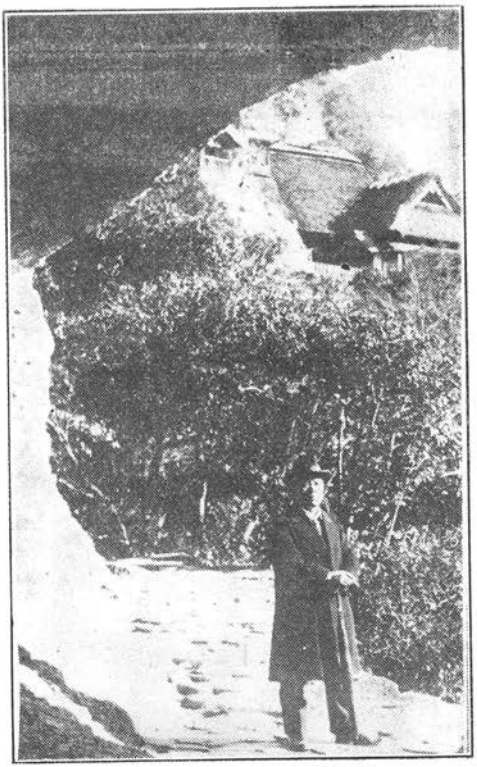
出世　一18
恩人　廿六15
四八63　五三54
四九53
五二49　男の子　四五54
恩給　四七44
五八41　押賣　五〇56
置去り　五一47
往診　五三48
起き拔け　五六47
應援　五八43
大聲　五九53
旅費　十四21
老人　卅五23
五三56　留學　四一35
五七53　零落　四四59
五六46
四七45　樂書　五五56
歷史　五七46
立腹　五九50
五六44

取次はしごろもごろで留守を云ひ　恒子
風采も告げて取次用がすみ　英賀夫
取次の胡散臭いと云ふ目つき　ひさし
取次が去ると番犬また唸り　波紋
三度來た事を取次覺えてる　白帆
講義錄ふせて取次立ち上り　光路
肩書を見て取次は改まり　潮多浪
取次の嘘と金策思へども　坊（ゆづらん）
取次はそんな人とは知らぬなり　皎月
取次いで貰ふ電話を二ッ書き　突支坊
取次の側で優しい聲がする　悟空
取次の二度目は不承無性なり　東狂子
三ッ指をついて取次ひき下り　愛子
取次は足袋の汚れを見せて入り　竹堂
取次は袴のしわを直して出　文蝶
取次が去つて額の字讀み直し　太路
取次にしては話がよくわかり　菊路
取次の膝が乘り出すいゝ話　雨月
取次を賴んでほこり拂ふなり　秋無草
取次は來意をまだるさうに聞き　一風
取次に出る妻乳房入れてたち　沒食子
取次の女中を褒めて通るなり　新水
取次に出た娘をそつと見て歸り　京郎
取次へ悔を云ふて歸るなり　翠峯
玄關に濡れ手のまゝをあらたまり　伴内
叱られて來て取次は聲をかへ　陽喜亭
取次ぎのあと追つて行く見舞客　美一郎
仲のよさ取次手持ちぶさたなり　一風
取次の要らない客となつて居り　蝸牛
取次を呑んでかゝつて會ふ氣也　琴人
取次が叶ひスリッパ揃へられ　雪緒
上官にする取次はすぐにされ　同
取次へヤアと浴せる顏馴染　高峰
妹に會ふに取次ゐる暮し　同
本意なくも取次に說明したけし
取次の機智それ〴〵に追ひかへ　同
取次の傳へてる聲よく聞こゑ　同
今さめた顏で取次躊まづき　町二
取次のうしろ姿へ凄く笑み　同
取次の若さ居留守をさこられる　同
警戒のいろあゝ〳〵と取次がず　同
押しかけた二號をうと奥へ云ひ　同
(佳)取次の不平は遲い足になり　萬樂
(佳)取次の姿が見えて電鈴を止め　高峰
(佳)取次を兼ねた主人の氣輕るさ　黑夫子
(佳)電話から取次ぐ節がてもれ來る　冷々子
(佳)取次の手にそぐと知る温か味　たけし
(佳)三ッ指をつかれ零落氣が弱い　町二
(人)取次のゐる丈俺と彼の距離　鐵洲
(地)取次いでゐる日々の單調さ　たけし
(天)おとなへばかん留守よど彼女出る　町二
(軸)取次の僧は賣僧こまでゆかず　毒仙
心配　四10　廿一17　卅九17　四八69
散歩　四18　四〇5　五二47　五三56
嗜眠性腦炎　九15
姿　八12
少女　十二36　五八46
送別　十二38　青年　十二38
散髮　十二39　試合　十三18
さり泣き　十四14　世辭　十五9
試驗　十五13　私生兒　十七16
空腹　十五13　五八50　姿見　廿19
情死　十九13　五八49
信心　廿一16　五〇49
洗濯　廿一21　四〇31　品切れ　廿八10
紳士　廿三9　初對面　廿九33
主人　廿七12　青春　卅一27
整列　廿九20　謝恩會　四〇33
死顏　卅一21
失戀　卅四13
卒業　卅九44　五一34
盛會　四〇14　五三52
先輩　四〇30　四二54
昇給　四〇34　財散　四一43
親切　四一46　五〇66
衰弱　四一46　四四54　掃除　四二50
素顏　四二52　少年　四三37
思案　四二52　五六49
相談　四三35　五八42
梳髮　四三54　酌　五九49
先代　四五48　失業　四四59
正直　四五54　四五54
出張　四五54　末の子　四六33
肖像　四六48　叱る　四六51

川柳旅日記

北九州から松山まで一週間の旅

庄萬よし



（耶馬溪に於ける萬よし氏）

た。小池氏は悪性の眼疾にかゝり養生中で夜道は不自由らしいのに、早速打連れて榎園矢大臣氏を誘ふて半里もある製鐵所倶樂部に野田來人氏を訪ねた。

新築の倶樂部は帝劇の待合室を偲ばすものだ。その廣間の一隅を占領しての柳談は猪口の數に比例して高潮に達した。來人氏は八幡柳界の重鎮として或時は柳誌を出したり或は媛柳の支部を設けたり二十數年後進の誘導に盡されてゐるさうである、氏獨特の諷刺を混へた漫談のうちに、路郎主幹と八幡柳界との二タ昔以前の交情から、劍花坊、飴ン坊、半文錢五葉、而笑子氏等の作品及人物評等があつて多くの興味を感じさせられた。矢大臣氏の新進氣鋭の舌鋒と萬よしの管に近い氣焔とは給仕の眼を圓くさせた。二十年勤續の銀盃をうけられてから、もう數年になる知句川氏は、眞面目其もののやうな人、四四郎氏は默々として感心居士を極め込まれる。柳談と酒肴は限りもな

八幡

廿日唐津を見物してその歸りに一ヒ汽車後れて、八幡の山内知句川氏の宅へ着いたのが晩の八時二時間も遲刻したにも關らず、小池四四郎氏と二人で、心配し乍ら待つていたゞいたのはうれしかつ

いが、倶樂部の迷惑を思ひ一時過ぎに別れて知句川氏宅へ着く。健吟家矢大臣氏の發議で句作を始めた。時經て矢大臣四四郎氏を送つて、枕を並べた知句川氏と柳談のうちに夢に入つたのは三時も過ぎた頃だつた。

勤續の息子は江戸と神戸に居
勤續のもう駄目ですと丈夫なり

松山

二十二日午前十時、伊豫鐵道の本社に突然前田九健氏を驚かせたが決算前の最もお忙がしい日とかで初對面の挨拶扱きで十分間の柳談、松山柳界の重鎭として齒切れのいゝ會話、要領を得ること夥しい。お得意の劇談や野球物語りは聞く暇がなかつたが川柳雜誌社支部新設に就ては一方ならぬ配慮を煩はした。俥で西山玄々子宅へ送られると話對手が欲しい處だつたと早速奥さんの料理で呑み始めた。

そして松山柳界の歴史からエピソード何も彼も打割つての話振りお父さんが天盃を頂かれたこと、奥さんの在所へ遊びに行かれて留守だと云ふこと先代から書畫が好きだつたことなど等々で五合を片付けた。

君らしい俥の音へ　火をほぢる

陶然の氣を松山城へ運んで天主閣から落ちついた松山の市街を眺めた。北に高濱、三津の兩港、南に道後の湯の町、學校と兵營と官衙との町には煙突といふものが見られない。澄み切つた空である。雜沓から脱れた町である『坊つちやん』の教師の蚊帳へ『バツタ』を入れるやうな腕白な中學生が居ることは思はない靜けさである。

祭にはこの淵で惡戯をした處です、花の句會はこの門の石垣でやります。五健氏の宅はあれ、玄々子の宅はあれなどと指しながら城山を下り、練兵場を横切ると、突き當りの山が淺井冷々子の祝谷であつた。

柑橘栽培家冷々子氏は家族召使總動員、温州蜜柑の荷造眞最中であつた。

蜜柑むく手で湯の町は敎へられ

二階から見下ろす道後の山々は、朝夕四時に青黄紫紅に色を變へるそうである愈々支部新設のことを語り合つた。冬の陽は松山城へ落ちて了ひ、花の道後へ再遊を約して玄々子と夜の市電に乘つた

紅丸の夢は門司、八幡、松山の柳友の厚意を乘せて瀬戸内海の波は今宵最も靜かである

柳友を思ふて船の風呂にゐる

觀梅吟行

日時　三月三日、日曜日)午前九時
南海難波驛集合(九時二十分發
電車にて出發)
行先　樽井驛下車道路平坦十八丁
金熊寺觀梅…砂川奇勝遊覽
兼題　「梅」三句
會費　金三拾錢　但シ辨當御持參電
車賃御自辨ノ事
主催　川柳雜誌社濱寺支部
同　堺支部
同　住吉吟社

川柳家よ團結せよ

松盛琴人

人間はその周圍の自然界に働らきかけ且つそれを變化することによつて自己の本性を變化する、社會に於ける自己の地位を改善せんとする努力によつて、社會を知り自己の社會的立場を知る

……マルクス……

マルクスにこれだけの熱と努力があつたればこそ、彼は永久に生きてゐるのである。川柳家は、その一句に依つて社會を動かすだけの力を持たねばならぬ。一句よく自然界を變化させ得る偉力を發揮せねばならぬ。斯かる地位まで川柳を向上せしめねばならぬ。さて翻つて柳界の現狀を見るに、川柳の社會的地位を考へてゐる人の餘りに少いのを嘆かはしく思ふ、マルクスぢやないが『川柳家よ團結せよ』と言ひたい、驚同伐異を繰返して、今日の我國の無產黨の如くに仲間で仲間を排擊してゐるのは實に醜いものである。内で爭ふ力を外部に向つて出すべしである。一人の川柳家が、一人の新しい川柳家を作る事がやがて川柳を社會的に進出せしめる動因となる。この熱とこの努力を不斷に拂つてこそ川柳は社會的に向上せしめることが出來ると思ふ。萬事はそれからだと思ふ。

第一卷時代

津川紫吻

久しく『川柳雜誌』を見なかつた私がこの第六卷新年號を手にして、創刊當時の同誌を思ふこと切であるのも總てに物を顧みる本能の一つとして止むを得ないことである。新年號四十一頁、安井ひろ

冬の御用品
あれしらず

御代乃花

本舗 伊藤大一堂
發賣 高橋盛大堂

到る所の藥店化粧品店に販賣す

し氏の『金玉の文字を顧みる』を讀んで見ると、あらましの狀態を知ることは出來るが矢張り手許に其の所在を探るもの〻一つでも有たなければそれから受くる感じが、どうしても薄い。幸ひ私の文庫にはこの創刊號から第十號（大正十三年十一月十五日發行）分迄を合本にしたものを所持してゐることは何よりの心強さと喜びである。創刊號に於ける路郎主幹の近作から左の數句をひとりでに拔いて私の好きな句だと言ひふらしてゐたのも隨分古いことの思ひ出ぐさである。

ひるひなか蠅とる用があるばかり
豚の子へ續く豚の子ばかりなり
青いソフト東京の夢巴里の夢
初戀の思ひ出になる夏蜜柑

『近作柳樽』へ移つて見ると、北海道の句樂さんのその頃が思ひ出される。健吟家だつた氏が近頃どうされてゐるかと思ふことも之から受ける一つの惱みである。古城山氏の事も同樣、蘆穗氏然り、目に映ずるもの〻中からこんな事共を思つて見ると果しない。

第二號（三月號）の扉には『金熊寺から砂川へ』當時の寫眞版が載つてゐる。それは觀梅吟行で二月十八日第三支部主催の下に云々と零骨氏の文が前提されてゐる。今年も梅がちらほら匂ひ出しそうである。『川柳雜誌』の當時を今思ひ出される人々があるとすれば、それはきつと、懷しい『あの頃』といつた思ひを深ふせられる事だらうと私は思ふ。

…一、廿八、夜十時一輪挿の梅一輪を句ひつ〻…

海鼠の値

大山露斗

僕と屏三呂君と正月二日の朝彼の宅で柳談に正月も忘れて熱心に話し出すやがて母堂の心盡くしの酒が出てメートルはます〳〵あがる。その時表を『海鼠々々』の聲……屏三呂君は行きすぎた海鼠屋

色紙　短冊　畫帳　俳卷　其他

和正堂

大阪市東區安土町二丁目
電話本町一〇四六番
振替大阪九一七五番

を呼び返して『高かつたら買わんで』と云ふ。おつさん『へい〳〵』と云ひながら海鼠を出す小さな海鼠四ッで『三十錢だす』『そらおつさん高い二匹負けとけや』屏三呂君が値切る。おつさん蓋の上の海鼠を皆あけておこつて擔いで行こうとするそのさまが可笑くて腹を抱へる。屏三呂君が又『おつさんそつちのん見せてんか』と云ふと立ちかけて荷を又下ろして今度は大きい海鼠を出して『四ッで六十錢にす』『おつさんそれ三十錢なら買うがな』と云ふと又『盤臺へ明けてぶつ〳〵つぶやるて行くそのさまが商賣下手と云つてよいか上手と云つてよいかその歸つて行　樣が非常にユーモアに富んだ恰好であつた。それを家の中で聞いてゐられた母堂が『世の中が變りましたなア……海鼠は亡くなつたこれ（屏三呂君）の父がよう買つたものだすが値切つた半分位は負けましたのになア』との述懷に百貨店で値切る人があると云ふ話を思ひ出して商賣の仕方が變つたことをつくづく感じさせられ。それだけ世の中が忙しくなつたんだなアと思ひ何だかぢつと呑んで居られないやうな氣持になつた

作句妙藥

桑原京郎

川柳作句二年の苦心を顧りみまして、こゝに自家用特製一子相傳の作句妙藥をこれ上げました。如何でせう？

眞に泣け、眞に怒れ、そして
心から笑へ……だが
一寸待つた！　泣いてしまふのは
怒り切るのは、笑ひ飽きるのは
その喜怒哀樂の瞬時の苦悶の中にこそ
樂しき幸福の、幽か乍らも
尊き光があるのだ！
柳句の萠芽、おゝこの萠芽！
彈ちきれさうな生活の
眞劍な熱によつて
その光によつて芽ぐます

さうだ！汗をかくのだ、懸命に！
これだけを原稿に書いて、茶碗の熱湯に浸しフウ〳〵吹き乍ら　醒めぬ間にその湯を呑む……何と奇妙不可思議の靈藥なる。

（一九二九、一、二）

新誌友（四年二月十七日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新購讀者を御勸誘下される樣お願ひ申します。御紹介下さる方には川柳雜誌を見本誌として差上げますから御申込下さい。（二柳子）

藤田道太郎、内藤栗太郎（長崎柳秀）鹽崎棋吉（麻生路郎）澤井信次郎（安井ひろし）酒井喜一（神戸支部）中野玄洋（名賀壽會）樋口法念（安藤花蝶）高田穗波、山本藤太郎、鷲田南耕、伴野博、富士野鞍馬、平塚豐次郎、櫻井節太郎、辻左馬、櫻井如一、辻清好、山口柳川亭、土肥好次、吉川啞人、手丸淺吉、廣瀨三郎、濱本鹿男出口善治、今村吉朗、畑田炭車、森井荷十、中西五合（本社事務所）（括弧内は紹介者）

川柳は一生の仕事

池田滿壽美

「あなたは近頃めつきりお頭が禿げましたねぎうなさたんです」
「ウンごうもさうらしい。今日もN君近頃何か御心配でもあるんですか、頭が薄くなりましたねと言はれたよ」
「何故でせう。妾此間からそれが氣になつて仕方がないんですの」
「サア俺にも分らんのだがなア」
「あなたはよく夜遅くまで御勉强になつて居られますが、そのせいぢやございませんの」
「ウンさうか、それでか。成程……」
「一體何を御研究になつてゐますの」
「川柳さ」
「川柳を御研究になつて、頭を禿げさしちや、つまらないぢやありませんか」
「イヤそんな勿體ないことを言つてはいかん、私は川柳をやり出してから、自分の知らない世界をごの位知つたか知れない」
「でもそれを知らなくてもちつとも困らないぢやありませんか」
「イヤそんなものぢやない、未知の世界が私の眼前に拓けて行く愉快といつたら何とも言へないよ。そして自分が今まで見て居た世界の如何に小さなものであつたかと、言ふことに思ひ至ることぞつとするよ」
「そんなに川柳つてものは有難いものなんですか」
「ウン私にはまだ本當の川柳といふものが分らない、私が大學の教授をしてから二十一年になるが、まだ分らないことが澤山ある。一年や二年川柳に首を突つ込んだからつて川柳が分る道理がない、川柳は私の一生の仕事だと思つてゐる」
「そんなに川柳に凝られては、あなたの頭の毛は一本も無くなつてしひますわ」
「頭の毛ぐらいは問題でないよ。仕事に疲れた時、藥物の研究がウマクゆかずクシャ〳〵してゐる時に、川柳雜誌を擴げて讀んだり、作句三昧に入つてゐると、凡てを忘れて何も彼も考へなくなるよ、私は全く川柳によつて救はれてゐるんだよ」
「それぢや仕方ありませんわね」

これは醫學博士長崎柳秀氏の家庭に起つた或る會話の一節

各地柳壇

川柳雜誌社 二月例會

二月九日夜　於日本橋倶樂部

本社二月例會は久し振りにしんみりした、親しみのある句會であつた。松山支部創立句會に出席のため主幹と二柳子氏は中座されたが、紋太氏より「心のまゝの川柳、あるがまゝの川柳を生め」との氏の心境より說かるゝお話があつて、なごやかな早春の一夜を過した。(安井ひろし記)

(參會者)

路郎、二柳子、素人、萬年青、五輪、一杉、文蝶、善治、萬古、ひろし、喜由、テルホ、昶、愚陀、黑天子、瓢山、貴山、やなぎ、觀月、孤舟、柳之助、桂風、蒼梧樓、里十九、明果、青二路、萬よし、虛白、沒食子、賀名芽、紋太、呑陽、さだを、源坊、舟々、鵜峯、突支坊、毒仙、革郎、加香、柳狂、双柳、郡、美都路、鴻堂

兼題　白髮　紋太選

出世が出來て白髮をそめて居る　萬古
梳きつける櫛に白髮を又見つけ　萬年青
こんにちの重い役目へ白髮あり　黑天子
うしろ向く敎師此頃白髮見ゐ　楓林
福白髮なゞ愛想が拔いてくれ　吉朗
心づいてからの白髮の增ゐる事　ひろし
禿げたのへ白髮中々まけて居す　突支坊
痩ぎすの白髮子供をよく叱り　素人
氣苦勞を壓へて白髮染めにゆき　京郎
白髮など忘れた樣に呑んで居る　一杉
子が產れ白髮が增ゐたばかりなり　愚陀
はげたよりましと白髮をなでゝゐ　里十九
番頭と云はれて白髮ふゐるなり　二柳子
萬策のつきて白髮をあきらめる　テルホ
若い妓に白髮〳〵とむさがられ　毒仙
染めて來た頭を一寸うつして見　健秋
子澤山白髮頭のまゝ稼ぎ　同
髮白く子供相手の錢をくり　舟々
たま〳〵の母の白髮もなつかしく　同
冬の空ながめて股火する白髮　文蝶
白髮拔いたげまひよに裏返り　同
白髮染忘れた頃に洗はれる　源坊
ためらへば父は白髮を拔いて見せ　同
或日ふと女優白髮を見付けたり　呑陽
(人)用件のあとは白髮を囁り合ひ　同
(地)此の白髮見たら無心も云へまひ　テルホ
(天)可笑しさは白髮の人とうまがあ　ひろし
(軸)泣くやうに云ひ白髮を拔きがり　紋太

席題　味　萬よし選

十年一日辨當の味　一杉
食通にされて板場と飲んで居る　蒼梧樓
味等はどうでも好いと急ぎ立て　田郎
良い味を賞めて水ばな一すゝり　双柳
風味はロハだと喋る。こと　賀名芽
姑に炊いて貰うた味を賞め　孤舟
味はうてくれとちよつぴ皿へ出し　愚陀
食ひ倒れてふ大阪の味に馴れ　きよし
苦心した味をまじめに賞めてやり　突支坊
味氣なく子なき五十の坂を越し　素人

富士山にて

石室で喰ふ味噌汁の別な味　五輪
このわたの味がわかつて儲からず　革郎
甘いとも辛いとも言はぬよい亭主　善治
味をみてる女房亭主へ返事せず　同
味ほめて又一本をつけさせる　沒食子
賞められた味へ女房も箸を出し　同

其味は奥樣も出て說明し　萬年青
大阪に來れば大阪の味　同
淡々として居て味のある男　ひろし
味なこと云ふと親ガ腕を組み　同
味つて貰べと兄の添手紙　毒仙
(客)段ちがひ味をやるなと受流し　同
(客)御禮の手紙に味の事も書き　觀月
(客)お前等にクサヤの味がわかい　蒼梧樓
(客)大食ひに左程でもない鯛の味　紋太
(客)味なこと見せてピンチを切り拔け　一杉
(人)下あごをつるとなでゝ味を見せ　双柳
(地)すき燒がもう出鶴目な味で煮え　紋太
(天)情けない味に花嫁してしまひ　舟々
(觸)味のある方とは旨い敬語なり　萬よし

席題　ゴールデンバット　素人選

調停の後にバットがけむつて居　貴山
一致點どうやらみゐたバットなり　一杉
飛乘りの耳にバットの吸のこし　突支坊
腹卷へ出前バットの型を見せ　きよし
仲居へ一人が云へば皆バット　田郎
鐵層へバットを捨てる腕ッ節　ひろし
いつあがる雨やらバット切れて居る　毒仙
バットの箱へ所を聞いて書き　觀月
ゴールデンバットの空に夜が更ける　善治
無くなつたバットの箱を投げて去に　沒食子
一本のバットへ仕事場二人吸ひ　明果
バットなら品切れですと奥で云ひ　五輪
社長特にバットをふかし記者に會ひ　萬よし
そんな筈無いポケットにバットだけ　テルホ
風采に似合ふバットの箱の色　紋太

探られる袂にバットだけの當　孤舟
バットの煙煙話がまとまらず　舟々

席題　議會　ひろし選

憂國の默々として議場出る　萬年青
泥仕合つゞけて議會くたびれる　沒食子
勝負けの外に議會の興もなし　蒼梧樓
答辨のお國訛が耳につき　孤舟
不信任案力んだ丈けの損となり　双柳
婦人デー今日春らし議會なり　萬よし
新聞丈けの議會に興奮し　田郎
議會見て俺れがと思ふ所もあり　桂風
貴族院ひつそりとして二時が鳴り　源坊
奥樣も議會の事を案じて居　觀月
反對黨曰く議長は不公平　素人

席題　吊り革　互選

その話吊り革持つて又續け　きよし
吊り革に土の着いてる手も掛り　田郎
網棚へ吊り革あたる終電車　貴山
氣が付けば吊り革握りしめてゐる　一杉
吊り革へチャールストンで寄りか、　五輪
吊り革を双手に取つてよい氣嬉　萬年青
吊り革を一ッ讓つておくれやす　源坊
カーブになつて吊り革の音　黑天子
つり革へ背の坊やはのびあがり　ひろし
吊り革をへだてゝ妻は小さく居る　沒食子
袖に手を當てゝ吊り革持つて居る　さだを
吊り革を持つて田舍の母と乘り　孤舟
吊り革を重い荷物へ持ち變へる　善治
吊り革へ來ると恩師が掛けて居る　同
失ふた身を吊り革へたよらせて　テルホ

吊り革に寶生流が搖れて居る　同
割り込んでまだ吊り革を握つてゐ　觀月
入庫の車掌吊り革にぶらさがり　同
吊り革へだいぶ押された手で握り　桂風
吊り革はこの次降りる人を知り　同
吊り革を二つもつたが動かない　愚陀
吊り革の冷い朝を通ひなれ　同
もうおりる客へつり革よつて來る　蒼梧樓
面白う吊り革せなの兒にゆれる　同
吊り革を車掌の聲に持變へる　文蝶
吊り革へよう〳〵とゞく女の子　同
吊り革は靜かに車庫の線へ入り　紋太
吊り革へやう〳〵の娘に席がなし　同

席題　泥　互選

アット言ふ間に圓タク泥を刎れ　鴻堂
泥の道市バスの空が續くなり　萬よし
泥足でドヤ〳〵〳〵と長廊下　呑陽
雨上り泥道のまゝ新開地　沒食子
白足袋で新開地の泥をゆく　貴山
つまづいて泥着いたまゝそを逃げ　鶴峯
神聖にして地下足袋に泥がつき　柳之助
拔き足さし足で泥の道を行き　善治
泥はれて行く道々のなつかしく　ひろし
國の父泥のまゝなる土產出し　さだを
長靴が反り味で泥の中を行き　突支坊
泥をはらひ乍らの妻の愚痴　テルホ
母親に泥をかくしてゐる眼付き　素人
あぐらをかけば洋服の泥　蒼梧樓
駈落の下駄に乾いた國の泥　孤舟

席題　裏　互選

悪友は裏から聲をかけて呼び　善治
子供の足の裏に大呉は眉をよせ　素人
融通をきかせ何んでも裏がある　萬年青
値を決めるトンビに裏が附てなし　觀月
丸橋を踊るに羽織の裏を着る　賀名芽
赤いべゝ賞めれば子供裏を見せ　善治
縁談の裏道知つている炬燵　没食子
裏口でまだ話してるおすそ分け　テルホ
夜更けて母は裏の戸開けて居る　さだを
裏の戸が開いてて氣味の悪い晝　ひろし
カフエーの裏で電車のはしる音　貴山
裏の道から買物戻つて來　鴻堂
裏を返へせばなつかしい友　源坊
裏路を廻つて追手に見付けられ　田邸
裏通り一足出れば電車道　一杉
裏切つた女に遭へば抱いて居る　虚白

川柳雜誌社 創立記念川柳大會

松山支部

早春秀に見る快晴の二月十一日　健國の佳節に川柳雜誌主幹廉生路郎先生橋本二柳子岩本素人の三氏を迎へ木の香新らしき道後公會堂に於て我松山支部　創立の記念句會を開催。定刻十後一時には續々會員來集し支部幹事として私が發會の挨拶を述べ、記念品の贈呈、兼題披講後、主幹路郎先生は「子規に就て川柳を語る」と題し子規を生める松山に對し最も意義ある講演をされ、いに一同を感動せしめられた。各支部並に有志各位の祝電を披露して席題披講を了へ　記念寫眞の撮影をなし、粗餐券を呈し點燈後大成會裡に漸く閉會した散會後道後公園望月樓上に有志廿四名の晩餐會を開き宴酣なるに及び一藝廻しの發儀起り皆それ〳〵得意の踊と咽喉に歡聲道後の全街を動るがさんざかり。中にも一際目立つて拍手を浴せかけられたは五健氏獨特の野球ステテコであつた芳之助の踊・時雨樓の紀伊之國など衆を抜いたものであつて藝達者計りで確かに紅裙連を手古摺らせてゐた又素人先生の支那語？一同を啞然たらしめた斯く盛況極りなきうちに宴を終つたのは松山に於て近來にない賑やかな川柳大會であつた。來會送句者併て六十三氏參會者並に祝電をよせられた各位に深謝します。

（淺井冷々子報）

（參會者）

路郎主幹、素人、二柳子、五健、大樓、玄々子、大驚、雨桂　句涙人、壺雪、双葉、時雨樓、芳之助、柳女、斜松樓、陽帆、斗山、文芳、巨城、喜峰、素泉、花之助、みのる、水樹、匁々、一止、一笑子、艸二、十四公、雀坪、廣稔、逢川人、佛手柑、雨眠、極光、其他の諸氏と私

祝　吟

祝谷まんまる肥えた子が産れ　長洲坊
祝谷こゝも柳の芽が伸びる　欠伸
祝谷柳に芽ぐむ春になり　轉德利
川柳芽を吹くあたり春の風　甦柳
春の日に芽ぐみて伸びる若柳　杏坊
風あるも風なきもよし柳伸び　五健

席題　見晴し　佛手柑選

見晴しに團子の足らぬ人出なり　水樹
見晴しに花の時分をつけ加へ　五建
見晴しを占めて氣兼な日が暮れる　文芳
見晴しへ來てよみがえる人間味　大樓
見晴しにまづい料理で呑れて行き　斗山
見晴しへ折詰にらい息で來る　水樹
二階借只見晴しを賞められる　柳女
見晴しへ早先がある花莚　同
見晴しに腰掛一つ置いてあり　計加
見晴しに醉どれがゐて近よれず　同
辨當の蓋を開けると舟が見え　廣稔
行軍を遠く見てゐる好い眺め　雀坪
見晴しがよくて書飯ひまがいり　巨城
見晴しの莚意見が二派になり　十四公
見晴しにさて仰山な折の殼　時雨樓
登山隊落伍を景にされて居る　斜松樓
眼の下を模型の樣な汽車が這ひ　雨眠
よい眺め一服つけて行くとしよう　斗山
見晴しで疲れ切つては連を待ち　大樓
見晴しの意外な所へ文化屋根　同
(人)ちと早い花に見晴し冷々て來る　水樹
(地)見晴しで醉た藝者が目立つなり　文芳
(天)見晴しの好い別莊の不自由さ　句涙人
(軸)見晴しへ來て禁ゐない一人なり　佛手柑

席題　通帳　二柳子選

姑が見ると通帳に無駄もあり　柳女
十圓がいつそ貴い通帳　喜峰
通帳の罫へ悪筆溢れたり　五健
通帳へ狹んで置いたまゝの紙幣　佛手柑
亭主には月末丈けの通帳　芳之助
通帳禁酒の筈を見付けられ　雨眠

帳付けになつて家計おさまらず　神二
通帳付け損ないへ念を押し　十四公
通帳主人の知らぬ借があり　逢人川
通帳へ一合宛が續くなり　同
通帳へ百圓札の派手な巾　五健
(佳)通帳又食ひ込の高を見せ　双葉
(同)通帳火の用心の下へ掛け　十四公
(同)通帳線香一把に持つて來る　双葉

席題　機轉　素　人選

模樣換へ幹事の機轉賞められる　大樓
妾宅は機轉の利いた下女を置き　時雨樓
眼で知らすそれと雛妓は慣れたもの　芳之助
睦まじい部屋へ機轉を利かす咳　廣稔
來客へ坊やの機轉賞められる　双葉
仲裁の機轉笑つて事が濟み　句涙人
言譯はよいとして眼で知らし　寵雪
早速の機轉に野次は封じられ　句涙人
仲裁の機轉命の無い所　冷々子
母親が機轉を利かす朝がゐり　玄々子
女房の機轉强請を逐ひ返し　同
女房の機轉でうまく場を逃れ　逢人川
機轉利かしたが女中の落度なり　素泉
目附役機轉利かして首になり　兩桂
(軸)機轉が利き過ぎちぐはぐな事にな　素人

兼題　度　胸　水

叢度胸仲間内では兄いなり　樹選
臨檢へ女の度胸侮ざれず　一笑子
遣引にいつそ度胸のいゝ女　双葉
もう度胸きめて何にも云はぬなり　欠伸
鉄强さをはつきり女別れる氣　甦柳
案外の度胸は女醉つてゐる　捨丸
手切金出されて度胸据え直し　五健
嘘をつく事も度胸の一つなり　秋無草
代表の度胸逐一詰めて來る　鷄牛子
親方はせゝら笑つて取上げず　文芳
案外な千供に皆んな舌を卷き　京郎
諦めか捨鉢か女いゝ度胸　三猿堂
大手術流石びくともせぬ婦長　玄々子
いゝ度胸少々は自暴も手傳ひて　冷々子
戀知つてからの娘の度胸なり　鐵洲
阿婆摺と間違ひさうないゝ度胸　源太夫
試膽會度胸を据えて寒く居る　轉德利
親も子も無くゝ度胸の好い男　杏坊
本當の度胸ではないコップ酒　句涙人
目論んだ程に度胸の無い男　十七八
本宅へ話を詰めに妾來る　蛙面坊
日本人度胸と云ふを持ち合せ　十四公
金使ひには若旦那いゝ度胸　喜峰
(客)女將から度胸一つと教へられ　逢人川
(客)つまらない度胸を見て驚られ　十四公
(客)知つて居て計られてやるいゝ度胸　長洲坊
(客)道ならぬ戀に女の度胸見る　○美
(客)復讐に行つて度胸に惚れて來る　町二
(人)親分の度胸を賞めて酒になり　巨城
(地)役立た度胸二三日床に就き　柳花坊
(天)投げ出した度胸に運が向い來る　柚蘭坊
(軸)脇息へ遠く度胸を認められ　湖山
水樹

兼題　水　五　健選

此のあたり迄來た水は跡を見せ　大鷲
端折つて水撒く程に世帶ぢみ　双葉
大バケツいきなり置て搖りこぼれ　十七八
遠足の列の亂れる井戸があり　かき松
澄んで居る水を濁しに家鴨來る　鷄牛子
噴水も造つて派手な暮し向　捨丸
水溜り千供を抱いて一二の三　長洲坊
曲り角から急流になつた水　二柳子
醉覺の水は舞妓が汲みに下り　廣稔
醉覺のお冷やへたんを禮を云ひ　十四公
花立の水を忘れぬ年になり　同
向ふ岸何か云ふてる水の音　柳女
打水へ白足袋苦笑して通り　斜松樓
海水へ定期で通ふ暮し向　芳之助
歡入の母も嬉しい水を汲み　雀坪
打水の禮に女の長話　喜峯
負けた牡蠣桝から水が深れそう　巨城
濁水の中で鰻の樣に生き　たまき
發電所水車小屋の進化なり　兩桂
卒倒へコップの走るあわてやう　長洲坊
あれ丈けの水で死れたを不思議がり　大鷲
皺伸しの水を弄つて叱られる　人鬼佛
半身の水へ鯉もう達觀し　柚蘭坊
水流は呑み込んでゐる渡し舟　秋無草
水面の俺は漫畫の樣にゆれ　三猿堂
信心の朝手洗水の冷さ知り　神二
水の音母は忙しい朝の膳　轉德利
登山服水を見付た顏の色　捨丸
水筒を持つのが谷へやらされる　京郎
水量を見て來て握飯にする　同
動かせば澄んでゐたのに濁る水　鐵洲
飯事の水も言譯程にあり　十七八
行軍が止るゝ水へ水へ寄り　大鷲
其深さ丈けに見せてる水の色　鐵洲

正直に今日も水車のきしる音　源太夫
はじかれた樣に飛越す水溜り　句涙人
盆栽へ水くどく〳〵と旅立ちし　雨眠
安植木無造作に水ぶつかける　時雨樓
水道を皆んなが讓る赤手柄　杏坊
岩清水角力の型で飲む美味さ　柳花坊
シヤベル丈け見て下水は泥を上げ　鷄牛子
水でも汲ふかと新世帶　素泉
醉ひ出したのへ水挿の口が向き　極光
辻占は水に緣ある職とあり　斗山
重役の硯に水の切れたまゝ　大樓
（五客）芹を取る冷た足に際が出來　○美
（同）飲みこぼす釣瓶の水をよけ足　人鬼佛
（同）橋に來て子は浮くのが欲しくなし　十七八
（同）水溜り書割程の影が浮き　大樓
（同）隣から水汲みに來て小半時　極光
（人）水鏡ちと舊式な戀に落ち　時雨樓
（地）急親展足らぬ水入振り出され　冷々子
（天）沈默を守る深さの水の色　湖山
（軸）水浴びて小鳥小さな虹をたて　五健

兼題　年頃　路　郎選

恥かしい事も出來てる十五六　轉德利
年頃の淋しく叩くタイピスト　長洲坊
年頃になつた妹みづくさし　人鬼佛
年頃の娘を父が見て戻り　杏坊
年頃を不良少年見逃さず　二柳子
乳母の智慧借る年頃の今日が來る　蛙面坊
年頃へ母の苦勞が一つ殖え　柳花坊
一と通りちやんと習つて嫁く用意　十七八
兄樣と言ふて九官叱られる　麥村
年頃の蓋恥くの字で聽いて居り　柳花坊
年頃の子に死んだ子を又思ひ　句涙人
年頃に兎に角下宿沸き返り　鷄牛子
年頃の水々したる貰ひ風呂　たまき
吾顏の程度が判る十八九　町二
年頃によく目の眉く母になり　秋無草
スマートな方と娘の赤くなり　大樓
年頃の誰に習つた投げキツス　町二
年頃の死ぬ〳〵、なぜゝ氣が弱し　眠聲
妹の何時から使ふ牡丹刷毛　長洲坊
年頃を工場へ通ふ帶の色　欠伸
石炭を運ぶに赤い襟をかけ　素人
春霞もう年頃の傘の色　冷々子
もう親と意見の合はぬ年になり　源太夫
年頃を御近所さんが危ながり　京郎
口笛の戀知る頃となりにける　甦柳
笑顏もう年頃と云ふしとやかさ　欠伸
年頃はもう安物で承知せず　巨城
年頃の娘持つ身の氣の弱さ　逢人川
年頃を模範女工で過ぎちまひ　芳之助
捜索の手は年頃に擴げられ　文芳
御無沙汰と違ふ話の伯母の用　喜峯
年頃を母の好まぬランニング　同
年頃の裾を氣にする向ふ風　廣稔
娘もう噂に上る年になり　雀坪
年頃を音と埃の中に生き　雨眠
年頃の淋しさ家を貧ふて立ち　佛手柑
（人）年頃を帶にも見せず父と居る　鐵洲
（同）年頃のやゝともすれば呼吸　五健
（地）年頃になつたが矢張り拔け居も　捨丸
（天）父の目にも年頃が判つて來　二柳子
（軸）年頃は櫻の咲いた樣に生き　路郎

路郎主幹歡迎句會（別府）

川柳雜誌社別府支部　木村晃卓報

二月十二日午後四時別府着大阪商船みどり丸に路郎主幹始め素人二柳子の三先生を迎へて芽柳會員棧橋上の握手は、もう十年のしたしみにて松屋旅館に旅裝をとかるゝひまもなく會員の來訪に昨夜の松山支部創立句會參列の疲勞をも見せず、夕食をさへそこ〳〵に柳談一問一答質疑をたゞされ、精進の途を開かれるに一同感謝する處あつて、時しもの嵐に「嵐」と路郎先生の出題にて句作三昧に入り十二時前散會。

ちなみに同夜凡柳氏參會「船」を出題御嚴選被下いました事を特に深謝致します。

參會者三猿堂、湯坊主、毛無僧、佐春、長松、晃卓、

席題　船　凡柳氏選

見送りへもう五分ですドラがなり　晃卓
船醉ひのまじない母は眞に受け　毛無僧
今着いた氣笛に滯活氣付き　三猿堂
船長の妻子船にはよう乘らず　湯坊主
其中の元氣さうなが船に醉ひ　素人
夫婦とも兄妹とも見ぬ船に　路郎
島の蔭から出る船が景になり　二柳子
漁船が陸に並んだ舊正月　同
（佳）見送りの嬉しさテープ切れ　晃卓
（佳）初旅の船のボーイをこわく見る　素人
（佳）ひとの子に慰められて船が着き　路郎
（人）ちとゆれて女の聲に渡し着き　晃卓

（地人の世の船にも別府へまでは）路郎
（天）船酔ひの娘賣られて行くらしい　素人
（軸）横濱へあちらの智慧をつけて着き　凡柳
出迎への眼に船足の遲い船　同

席題　嵐　路　郎　選

嵐まだ己のが体にならぬ笛　凡柳
家内中一部屋に寢る嵐の夜　素人
また竿竹が落ちたと嵐強うなり　二柳子
嵐の夜先きに目につく指のきず　長松
火の事も云ふて嵐をさきに寢る　晃卓
突當り　突當り嵐街をぬけ　同
（軸）よく考へることにして寢る嵐の夜　路郎

旅愁

遠く來てあらしの窓に子を思ひ　同

川柳雜誌社**堺支部一月例會**（堺）

一月廿五日　於大濱家族湯櫻上友淵貴山報初天神の夜會する者廿三名　ひろし氏より生活に即した眞實味のある句を吐けと非常に有益な御講演があり　多大の感動を與へられた。

兼題　當　選　ひろし選

主義の無い人も交つて當選し　朝陽
當選は敵を少こし賞めて置き　太路
當選は夕陽の街を突つ走り　呑陽
當選と聞いて妻君風呂へ入り　呑風
胴上げをされて當選無口なり　美一郎
當選の土藏の壁が剝げてゐる　萬年青
當選は默つて居れぬ顏になり　春汀
當選ときまつて候補よく笑ひ　二映
當選は床屋を呼んで剃らしてゐ　素人
當選者疲れた妻の酌に醉い　松風
當選の祝ひ病ひの床で受け　悟空
當選に母も嬉しく寫される　同
盃を受けて當選目をつむり　多聞
落選は笑ひ當選泣いてゐる　同
（軸）當選はしても頭の低い人　ひろし

席題　情　死　素人選

無ぞうさに巡査抱合ほどいて居　巨水
讒言に相手を呼んだ虫の息　太路
心中の片割れのまゝ老いて行く　田郎
情死か今日もあつたと出前持　朝陽
情死の席に霜が光つて居　呑風
情死をする程迄の戀でなし　飄山
空つぽの財布殘して情死する　加毛字
情死の思へば不孝者でした　一杉
打沈む二人へ巡査つけて見る　萬年青
冷へ切つた胸へ寫眞を固くだき　同
決心の二人キネマを見て戻り　呑陽
決心の二人巡査にすれ違ひ　同
（軸）朋輩の情死に眼を泣きはらし　素人

席題　マスク　多聞選

マスクただ二人並んで歩くのみ　太閤
マスク賣りマスク外して客を呼び　松風
死にそうな顏にマスクのよく似合ひ　加毛字
風ひきの見舞マスクもかけられず　又光
昇給の辭令マスクを外すなり　一杉
君もかさマスクがマスク見舞ってる　飄山
ふりむけばマスクはずして呼んでる　貴山
風邪ひきの人にマスクは横を向き　同
滿員車マスクマスクへ話して居　朝陽
踏切へ來てからマスク襟を立て　同
女客マスク素早く脫したり　呑陽
怒つてる父のマスクがよく動き　同
食堂の皿を並んでマスク居る　同
マスクかけ席を讓らぬ男なり　素人
非常警戒へマスク懷手　同
居眠りを裝いマスクの刑事居る　同
（軸）娘今日マスクをなしに逢ふてる　多聞

（車中）

（同）マスク默して五十六議會よんで　同

席題　稽古屋　朝陽選

稽古屋は演藝雜誌散らばらせ　呑陽
稽古屋で今日も友達一人殖に　緊舟
奉祝の稽古屋同士負けてゐず　太路
稽古屋の今日も晝から三味の音　不言
稽古屋の二階が見える二階借り　一杉
娘十八稽古屋の賑やかさ　加毛字
稽古屋へちんぱの子供今日も見に　貴山
稽古屋の隣に住んで壁訴訟　素人
稽古屋のあぐらの亭主嫌がられ　春汀
今晩の師匠の撥に癇が立ち　田郎
此筋に稽古屋一戸派手に住み　同
稽古屋に今日も逢つた聲を聞き　飄山
稽古屋も師匠の顏で弟子をとり　同
稽古屋の猫膝から膝へ行き　又光
稽古屋の庭に一足妙な靴　同
稽古屋へ通つてボードよく使ひ　さだを
稽古屋へ通ふに少し年が過ぎ　同
稽古屋のようも同じとこを彈き　ひろし
稽古屋の二階にだろう三味を聞き　同

金策の隣稽古屋鳴らして居　萬年青
稽古屋の向ひで一人やせてゐる　同
稽古屋の庭一ぱい派手な下駄　同
(人)稽古屋のひゑは爪彈きらしい音　呑陽
(人)稽古屋の出入に派手な聲たて　ひろし
(地)稽古屋の歸り小聲でうへてみ　二映
(天)稽古屋に女中は別な部屋で待ち　太閤
(軸)お師匠さんヲタイの番と舞扇　朝陽

席題　曲馬團　互選

曲馬團守子は次の藝を知り　太路
曲馬團汗握らして世を渡る　松風
さすらひの旅に咲かせる曲馬團　黒天子
曲馬團命を捨てるやうに書き　加毛字
先づ耳が引きつけられる曲馬團　一杉
色々の服光つてる曲馬團　朝陽
馬の顔敷へてはいる曲馬團　多聞
曲馬團幕のうしろの麥畠　同
おしろいが縄にこぼれる曲馬團　同
生みの親知らずに曲馬團の華　呑陽
曲馬團肩のこりさへ覺へたり　同
曲馬團ガーバのゐりを立てゝ觀る　さだを
曲馬團々長のむち物を云ひ　同
曲馬團こゝを在舞へば何處へ行く　巨水
曲馬團親方らしいがよく太り　同
曲馬團今度も東洋一と云ふ　又光
雨三日哀れは町の曲馬團　同
曲馬團チョイ〳〵幕を上げて見せ　春汀
曲馬團高い所から札をくれ　同
サーカスのテント破れるやうな音　同
サーカスの足場に雨の祭りあと　ひろし
死んだ子に似た面差しの曲馬の娘　同
サーカスのふくらみ見せて肉襦袢　同

川柳雜誌社
北濱支部　二月例會（大阪）
二月五日　（於支部階上）谷村稔報

兼題　職人　萬よし選

職人の火鉢だん〳〵灰をかき　悟空
職人は着物で來ると堅くなり　武子
麻裏のあと輕々と大工去に　稔
ぼろ口へ職人はもう手を洗ひ　幸泉
飲連れが來て職人の手が休み　同
職人の腕とは別な請取書　曼平
職人はぶつきら棒に承知する　同
(軸)街燈は左官鏝を燒く香ひ　萬よし

席題　寺　互選

何遍も聞いてやう〳〵寺へ來る　桂風
寺へ來て米の値打が安く見ゐ　悟空
またもとの靜けさになる鐘をつき　文蝶
遊ぶ子を歸へして寺の戸が閉り　幸泉
寺町を拔け墓場の灯がまぶゐ　萬樂
寺町でうちのお寺を見損ない　同
寺町の闇の長さへ眼をつむり　琴人
凸凹の頭が庫裡の灯に動き　同
曉へ木魚の音がこだまする　稔
秋刀魚燒く匂ひお寺の書を占め　同
寺があり墓あり夢は故郷らし　萬よし
寺のある村かと丁稚お氣に入り　同

兼題　仲人　琴人選

媒介は色の白いを繰りかへし　一舟
仲人を返してからは落付かず　武子
仲人への疲れは熱い茶をすゝり　文蝶
仲人は先祖の事も話すなり　桂風
下駄減つた頃に仲人役が濟み　悟空
仲人へ御無沙汰勝ちの幕し向き　丸葉
仲人に問へば不足の無い娘　同
仲人へ兄阿呆口をつゞけてる　幸泉
仲人は尋ねあぐんだ口を利き　同
何不足なく仲人へ沙汰もなし　萬樂
恙なう運んで觀世流もよし　同
仲人へ昨日と同じ茶器が出る　稔
仲人は想思の仲と知らぬなり　同
直觀的に仲人へよしと言ふ　萬よし
(軸)仲が好過ぎるに仲人してしまひ　琴人

兼題　蔭口　互選

蔭口の影が障子へ伸びて來る　文蝶
蔭口のこゝは日本橋の詰め　桂風
蔭口の二人バケツを提げたまゝ　一舟
蔭口を言ひ〳〵丁稚茶をこぼし　悟空
蔭口を云はれ乍らに母娘住み　壽枝女
出て行つた後に蔭口だけ殘り　武子
蔭口の輪に輪を掛けて本氣なり　曼平
スリッパの音蔭口へ近うなり　幸泉
蔭口へ何にも知らぬ顔を出し　萬樂
蔭口が便所へ續く女教員　同
蔭口のそれからそれと輪を廣げ　萬よし
蔭口は爪先きまでも見逃さず　琴人
また逢ふ男が出たと目と目と　同

席題　家　稔選

我家から見るシグナルは闇に浮き　文蝶

出られて見れば家の淋しき　武子
女の子家の近くで泣き直し　萬樂
家賃だけ儲け兼ねます腕を粗み　幸泉
家といふ意識のほかのビルデング　萬よし
峠から生活難のほかの家　同
貸家でも建てるつもりの金をため　琴人
家出人心配させて温泉につかり　同

川柳雜誌社
加古川支部
めだか吟社例會（兵庫縣）

二月五日　於黃彩居水田五彩果報

ひろし氏の御訪問を受け川柳談に花を咲かせ披講に時を忘れ終列車に乘り遲れられたのは御氣の毒だつた。

席題　白粉　ひろし選

白粉を急いでつけた跡も見ね　洛陽
本當に泣いて白粉駄目になり　泰山
白粉は彼の女を若く見せてゐる　同
白粉を塗り〳〵客に話してる　尾秋
女教員さすがに薄く塗つてゐる　黃彩
（軸）白粉を落せば母に生寫し　ひろし

席題　折鞄　互選

折鞄來て病人に安堵させ　洛陽
折鞄主人と苦節二十年　泰山
折鞄俥屋大事にさげて來る　同
折鞄から手の切れる札　黃彩
くたびれた腰を下して折鞄　同
折鞄の名刺はや斷はる氣　同
折鞄につこり顏で札を入れ　よしを
折鞄さげるとお醫者らしく見え　尾秋
聽診器氣味わるく出る折鞄　ひろし
無雜作に新聞入れる折鞄　同
時間表また出して見る折鞄　同

川柳雜誌社
梅田支部句會（大阪）

水谷鮎美報

兼題　貯金　二柳子選

歸國するとき貯金を出してくる　健坊
子供でも思はぬ金を蓄めてゐる　やなぎ
樂しみになつて貯金たまるなり　石竹
煙草までやめたがさほど蓄らない　里十九
どつさりと貯金をして〻獨り住み　賀名芽
ぼつ〳〵と百圓までためるなり　觀月
一家皆貯金をする良い暮し　同
（佳）貯金出した母親知らぬなり　石竹
（佳）病身と云ふのが金を蓄めてゐる　觀月
（佳）貯金してゐる兄弟の氣がそゝ　鮎美
（佳）内職をすにもさせて金を蓄め　同
（軸）命ためてどうするのかと言はれ　二柳子

兼題　刀　かほる選

刀をほめて高笑ひする　石竹
すきもなく刀の先がふるへて來　觀月
覆面が刀を抜いて闇をゆく　賀名芽
背中の子が刀を買へとせがむ也　同
由良之助刀はさびたなと思ひ　鮎美
侍の刀廓でじやまになり　同
大小投げてこらへる無念さ　やなぎ
劍の音聞へて心動くなり　同
刀から手柄話がはづむなり　同
寶刀を仕込杖して落ちぶれる　里十九
ためし斬りせんと新刀さげて出る　同
人拂ひ太刀持だけが殘される　同
（人）血刀を杖に親分まで報らせ　觀月
（地）村正を短氣な息子さしたがり　同
（天）重代の刀をぬいて見たうなり　石竹
（軸）江戸どきにしばし刀はあつけ　かほる

川柳雜誌社
小松支部
蘆城川柳社（石川縣）

素人氏歡迎句會

二月四日　於白山席梶井井々樓報

立春の靜かに更ける夜。尺餘の積雪に輝く星はきら〳〵と遲しなき銀世界に映じて吾社を訪れられた、本社の岩本素人氏を迎ふるのに相應しい風情だつた。支部幹事、柳一路、松雪堂、美どり葉、柳々子、柳三、太魚、井々樓、それに、知る人ぞ識る吾妻樓の若葉女も遲れ馳せながら參會すれば、十年の舊知に逢ふた心地がした。饗て宴會に移り、短冊、色紙の交換、珍客への地方色の披露、等々にて夜の更るを知らず二時過散會盛會を極めた。

出産　素人選

異郷の父から名前がついて來る　柳三
出産に落つきもなく煙草のみ　同
産聲がもう父ちやんと言ふた聲　同
つかはせる産湯へ嬉し顏が寄り　柳々子
産聲にもう父に母になり　同
出産の又考へる男の名　太魚
出産の見舞女の喋る事　同
難産へ又敷島をとり寄せる　美どり葉
三度目の知らせに初産生れたり　同

寢もやらず産衣縫ひつゝ日を數へ　松雪堂
（軸）安産の妻へ感謝の眼がみ潤み　素人

川柳雑誌社
二月十日　**螢ヶ池支部二月例會**（大阪）　牧田普門報

本社より萬よし兄糸屋町支部の新水氏が來て下さり會員一同非常に感謝してゐます。

兼題　城　萬よし選

國自慢まづお城から話出し　文雄
遠足が城の大石抱へてる　水本
公園になつたお城にラヴシーン　一雄
築城の巧みさへ技師舌をまき　藏六
松之助呪文を切れば城の中　波紋
城内に昔のまんま湧く清水　しげる
名ばかりで石垣もない城の趾　新水
城の木々平和に醉ふたやうに搖れ　皎月
秋日和城嚴然と高く見ゐ　同
壕の水靜かに城を守るやう　普門
ロケーション城を背負つたやう立ち　同
群蟻のやうに團体城へ入り　みのる
落城も今宵に迫る花の宴　同
夕映への天主はつきり壕へ浮き　同
（軸）世を拗ねたのが城跡を立ち去らず　萬よし

兼題　鏡　普門選

同情者なくば鏡の前で泣け　文雄
留守番は鏡の前でニキビ取り　山本
病室へ鏡冷たく光つてる　一雄
痩せたなと鏡の前で髭を撫で　惠美狼
引越の鏡臺だけを嫁が持ち　福助
湯上りは鏡の臺る顔を寄せ　地湧子
堪ねられぬ惱み鏡に映して見　皎月
夏痩を鏡に見てる白い顔　新水
ネクタイに鏡の傾斜直される　萬よし
子が出來てからの鏡臺墨つて居　松汀
ウインドの鏡へ圓い俺の顔　しげる
（軸）刈上げた鏡の前のいゝ男　普門
ポンピアン鏡へ女給二人立つ　同

席題　無駄　新水選

行き違ふ船頭無駄口たゝきあひ　みのる
嫌なのに勉强をさす親心　柳月
九分までは無駄で暮して五十過ぎ　萬よし
無駄話酒の五合も呑みつくし　承天
（軸）無駄話隣近所も寄つて來る　新水

席題　枕　互選

もう少し氣をつけて行け枕元　柳月
水枕心配そうな顔が寄り　湖舟
四冊を枕に試驗前の夢　萬よし
手枕を靜かに外す母の愛　波紋
寢つかうと焦る枕の位置を更へ　同
無理に泊めそれから枕買ひにやり　皎月
添へ乳に手枕のまゝ夢を見る　同

川柳雑誌社
京都支部　**加茂川の集ひ**（京都）

二月一日　川端菊水にて桑原京郎報

題　釜、蜆

釜を廻つてぼつかぶり潰される　京郎
釜底のさらへを牝猫あてがはれ　同
釜つけた小川へめだかよつて來る　新水
手涕かむで其のまゝ蜆量られる　京郎
春寒く蜆すこうし賣れ殘る　同
蜆取る船大川に流される　新水
蜆汁別莊の朝を思はせる　同

川柳雑誌社
梅田支部　**奈良吟行**　水谷鮎美報

二月三日

節分（車中吟）

節分の髮結ふてから風邪を引き　觀月
節分にせめて揚なと結ふてやり　同
節分をまつてたような高島田　賀名芽
島の内お化け同志の立話　同
狂人の部屋へ豆まく父無言　鮎美
節分に嫁はづかしく豆をよみ　同
節分の豆に舊友笑ひあひ　同
下宿屋の廊下うつかり豆をふみ　同

奈良雑觀

三笠山先生だけが麓にゐ　觀月
せんべいを買ふのへ鹿がたわむれ　同
女連れ四五人寄つて鐘をつき　同
三笠山とぎれ〳〵の鐘をきく　賀名芽
はぐれたかひとりぼつちの鹿がゐる　同
三笠山押され氣持で降りるなり　同
大佛のうしろで下駄のひゞくこと　鮎美
腰かけた石へ子鹿の顔がくる　同
奈良の街ぬかせんべいを持ち歩き　同

福引（車中吟）

福引もあるしとにかく買ひにゆく　觀月
福引を面白う見る乞食の子　賀名芽

福引の女名前の一等賞　鮎美
福引に下女持てるだけ持ってまち　同

名賀壽會例會（尼崎）

一月十三日　於大物村區事務所中野玄洋報

席題　花　聟　互　選

三日目に怖々ォィと云つて見る　月男
節高い手の花聟へ望みかけ　陽喜亭
花聟の姿を里で語り合ひ　莪峯
花聟も厚司になつてよく動き　宙外
花聟のこの頃家を留守にする　眠聲
可笑さは聟のすまゝた眞面目なり　盧白
花聟に足のしびれる日も續き　柳堂
妹の方へ花聟よく話し　同

席題　兄　陽喜亭選

勝負事何時も兄さん無理を云ひ　如竹
兄さんの眞似をするなと目で叱り　莪峯
兄が來て酒に話に夜が更ける　悅郎
何が氣に入らぬか兄は醉ふて居る　吉朗
兄一人こつそり呼んで打ち明ける　同
兄は兄俺は俺での立場あり　きくを
歸朝する兄の無電が待ち遠く　秀聲
謹など習い眞面目な兄にして　牛歩
兄丈けは生れ故郷にこびりつき　盧白
親のない今日の兄ぞと向き直り　柳堂
（人）事毎に恩きせる兄の情けなく　盧白
（地）相續の兄は内氣でものたらず　同
（天）故郷の兄にすまない絹を着て　吉朗

席題　焚　火　石　竹選

冬木立焚火の煙縫ふて消へ　月男
焚火焚火書の辨當待ちかれる　琴月
船世帶焚火に朝の明けて行き　絲郎
枕木を線路工夫は焚いて居る　牛歩
焚火から頭梁やなら腰をあげ　盧白
霜深い朝を焚火の笑ひ聲　秀聲
いつもの顏が揃ふて焚火なり　陽喜亭
焚火かこむで此頃不景氣　賀名芽
消へて行く焚火の灰へ晝の月　眠聲
今朝もまた焚火に着物兒はこがし　ひろし
（佳）子供等に占領された焚火かな　好巴樓
（佳）夕暮の焚火獨りが廣ふ居る　白鶴
（佳）氣兼れしてあた焚火へ煙が來る　吉朗
（佳）焚火からはなうつろの空を抱く　陽喜亭
ひろし

兼題　硝　子　選

窓硝子覗けば好きな人の過ぎ　秀聲
硝子戸へサラ〳〵と雪の降る　月男
京人形何時も硝子の箱に住み　莪峯
桃色の戀を包むだ窓硝子　秀聲
氣味惡き衛生博のガラス瓶　十五夜
凹凸を笑つて寫す窓ガラス　きくを
すり硝子誰か動いた影が搖れ　陽喜亭
すり硝子はつきりと影二つ見せ　盧白
「ガラス注意」硝子は破れて居り　きくを
カーテンにかくれて硝子こはれて居　眠聲
學校の硝子何處かは割れて居り　牛歩
破れ硝子めつそう冷へる風が來る　賀名芽
窓硝子氷の樣にいてて居り　秀聲
すり硝子開ければ溫い治療室　十五夜
ガラス戸の小椽に猫はよく眠り　宙外
硝子から子を出そまいとする日向　石竹
峠から光る工場の屋根硝子　琴月
村の灯へ段々眠い硝子窓　絲郎
（佳）夜更かした二人にくもる窓硝子　琴月

兼題　夢　眠　聲選

親の夢國へ安否の手紙出し　華月女
初夢を誰にも云はず娘居る　柳堂
死むだ子の夢の話で涙ぐみ　一星
初夢の景氣のよいが先に起き　宙外
よく夢を見るが無事かと國の母　吉朗
五圓券千圓の夢こびりつき　盧白
三等車途切途切れの夢を見る　十五夜
ふと覺めて續きが見たい夢の慾　同
戀人と夢で渡つた虹の橋　琴月
妾宅で見た夢今朝の相場欄　絲郎
別々な心になつた夢を見る　賀名芽
（佳）夢判じ聞けばあほらしいと計り　秀聲
（佳）夢には出て壁をぬつてる　石竹
（佳）悪い夢鴉の鳴くが氣にかゝり　宙外
（佳）うなされた夢安宿の軸動き　ひろし
（佳）夢で見た姑に二本角が生へ　琴月
（軸）悪い夢氣になる事を聞かれる　眠聲

わかて川柳會（丸亀）

二月八日　平澤ゆすらん坊報

立　て　札　甲　子選

里程標また元氣出すへんろ道　仙流
立札が殖ゑて神德高うなり　ひふみ
疲れ足あと壹町の札見付け　糖醉改
惡戯の見る立札は睨んでる　同
立札は新らしい程足を留め　素馬

立札に横文字もある名勝地ゆすらん　吉峰
注意札根こそぎ飛んだ衝突場　哲夫坊
立札へ酔漢愚痴を浴びせかけ　三尺野
下車札へ自動車背中向けて待ち　同
立札の前で都々逸低うなり　甘々坊
猥模様ゆすらん下りる車止め

梯子　甲子選

新築へ嫁も梯子の向きを云ひ　無食子
段梯子上と下とで顔が合ひ　仙流
ストライキ梯子の上で氣勢上げゆすらん　三尺野
剣劇の梯子しだいに捕手増し　哲夫坊
曲馬團呀つと云はせる人梯子　同
大工さん梯子の上で唄になり　甘々坊
木登りの子供へ梯子かけてやり　無食子
生酔がわざと梯子へ手間をかけ　甲上
甲上の清書梯子の親が下りゆすらん　同
看板屋梯子を下りて讀み直し

第十四回南海至誠川柳會（大阪）

一月十四日　於天下茶屋集會所

（其二）　竹内多聞報

兼題　雑吟　路郎選

錢のこと聞かれて笑ふだけになり　瓢霞樓
君もかい僕も子供が出來てるよ　同
女給かと親爺の聲は荒ふなり　萬両
床板の抜けた事務所に社長がゐ　福田
寒行のこれきりといふ聲を出し　呑陽

席題　似顔　互選

似顔繪の出來本人はチト不足　樂居
悲しさは似顔俺よりよい男　鳥平
笑つたとこそつくりですとお似顔　樂亭
似顔繪を描いて貰ふに髪を撫で　一杉
似顔繪はやはり自分の顔であり　伊藤
似顔繪を出せば子供が先に謂ひ　五輪
似顔繪は先喝采で迎へられ　飯原
然るべき顔で似顔が出來上り　一杉
一平へふせふぶせうに顔を見せ　路郎
課長の留守に似顔繪書いてあり　朝陽

席題　嬶曳　互選

戀人は目に物いはして席を立ち　飯原
制服が嬶曳に來る寶塚　五輪
嬶曳のゆめ賣られたも知らず居り　瓢霞樓
嬶曳は犬の尻尾を踏んじまい　呑陽
一寸した音も嬶曳耳を立て　瓢山
嬶曳の下りるに寒い三笠山　一杉
嬶曳の東京驛をせまふ出る　多聞
嬶曳へ案外せまい世間なり　萬年青
嬶引のあとをつけ度くなつて來て　内村
嬶曳へすまない事が積つて來　萬年青
嬶曳の外には雪が積つてゐ　樂居
嬶曳の約束空が曇つて來　呑陽
嬶曳を見付けて「今晩は」　福田
嬶曳の塲處選びの氣の毒さ　野中
嬶曳の背中に凄く月が照り　黄天子
嬶曳は惠方詣りも兼てゐる　樂亭
嬶曳の飽くまで友に白々し　一杉
嬶曳の符調でわかる手紙なり　樂居
嬶曳の奈良で財布を落して來　一稻
嬶曳に人妻といふ荷が重く　路郎
嬶曳は猿にからかひ乍ら待ち　同

雑　互選

二皿でキツチリあけた二合瓶　朝陽
つゝましく飲むには過ぎた二合瓶　一杉
ドツシリと大座蒲團は睨め廻し　黒天子
脱線へ我事のやう走つて來　吉田
ロケーション水に飛込む役もあり　萬年青
カーテンの中は幹事の樂屋なり　樂居
御無沙汰を電話でやつて汽車に乘り　樂亭
鉛筆のシンにも似たる戀なりき　多聞
鉛筆のシンまで折つたラヴレター　鰲島

第一回川柳南瓜會例會（八幡市）

二月三日　玉木南金坊報

席題　白粉、飯

酒の有る顔に父親なつて居る　笑節
白粉が無けりやならない顔に出來　嵐人
塗つて來た女工朝から冷かされ　泉花坊
子澤山悲しふ出來ぬ飯を待ち　微笑
冷へ切つた飯に憂しいわけを云ひ　雨石
ばく音に飯食ふ腮が皆止り　南金坊

阿波座句會（大阪）

松盛琴人選

腹の立つ火箸は灰をつゝきたて　素郎
友達の風の便りは病んでゐる　同
女將から藝者は嫌な事をきき　ひかる
鐵瓶の値段を聞いて撫でゝ見る　同
二萬トンするりと動く朝の風　稔
美くしい藝者だけれど啞のやう　不二夫

船唄や追風に辷る三十石　久々子
鐵瓶に時雨のやうな音を聞き　泉湯
新聞の下で鐵瓶音をたて　大地
氣象臺風と相談してるなり　五笑
鐵瓶の金氣もぬけぬ新世帶　方水
藥瓶トげた羽織の長う見ゐ　四五麿
熟かつた火箸盤へ投げ出され　同

名賀壽會小集（尼崎）

一月二十七日　於秀聲居中野玄洋報

席題　馬鹿・琴・短冊

貧乏は世間の人に馬鹿にされ　秀聲
馬鹿なればこそと勤めた年を繰り　吉朗
どうせ馬鹿よと仲居逃げて行き　同
お琴だよと妻に渡したレシーバー　玄洋
上下も知らず短冊書いて見る　同
どこまでも馬鹿になつて嫁にして　盧白
簿のろの兄に妹は嫁き遲れ　同
馬鹿でよし酒さへ飲めば馬鹿でよし　同
馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿と未つ兒だゝたこれ　きくを
出戻りコロリンシャンで過ごして居　同
短冊の枕屏風へ輕い咳　同

雅樂多莊句會（大阪）

二月十日夜　和田源坊報

兼題　共稼ぎ　萬よし・かほる共選

雪解けを待つ間都會で共稼ぎ　柳狂
共稼ぎ小遣帳をこしらへる　京郎
共稼ぎ焦がした飯も笑ひ合ひ　柳狂
椅子席でちんまり見てる共稼ぎ　松郎
共稼ぎ女房も少し呑める口　双葉子
すき燒にして共稼ぎ疲れてる　京郎
片親に爲替を組んで共稼ぎ　同
共稼ぎ亭主の方はパンを喰ひ　源坊
(佳)共稼ぎ偶に休みの日が出會ひ　同
(人)共稼ぎお大師さんに休むなり　松郎
(地)死にしな夜具も出來てる共稼ぎ　同
(天)共稼ぎ以前の會社やめてゐる　新水
(軸)共稼ぎ茶碗を五つ買ふて去に　かほる
(軸)共稼ぎ女房ばかりが老ける來る　萬よし

兼題　天才　松郎選

天才は髪と一緒に年が寄り　源坊
默々として天才は聞いてゐる　双葉子
天才で儲けることも知つてゐる　同
天才の小指の爪が光るなり　萬よし
天才へめつた矢鱈に子が生れ　同
(佳)友達に天才借りてばかりゐる　京郎
(佳)天才が肩をどづいて吳れと云ふ　かほる
(佳)丸刈りで其の天才を秘めてゐる　新水
佳天才のやゝ引きつゝた笑ひ顔　萬よし
(軸)天才ばかり蛸で呑んでる　松郎
(軸)天才の矢張疊の上で死に　同

席題　登山　柳狂選

登山服着る長男がたのもしい　双葉子
お花畑幹事は幹事掩は掩れ　萬よし
登山服利休を履いた人に逢ひ　源坊
登山靴選つてけはしひ道を行き　同
下駄履で無理に舊道登つて來　新水
登山して知らぬ溫泉浴びて來る　同
(人)勤めならあはしやす登山服　松郎
(地)商賣の話になつて山を下り　かほる
(天)驚に口笛合はす七合目　萬よし

席題　猪口　萬よし選

猪口持てば空飛ぶ人と思はれで　松郎
もらはれば惡し貰ふて猪口困り　源坊
まれごでいゝ盃を酌ぎこぼし　新水
(人)血壓の話に空の猪口を置き　かほる
(地)猪口を手に追かけられる浮氣者　松郎
(天)新任へ兎に角猪口が廻はされる　双葉子
(軸)脫線した氣焰の猪口は冷ゐ冷ゑ　萬よし

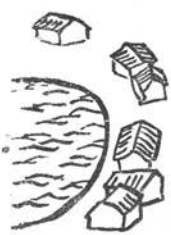
席題　濡れ足袋　新水選

濡れ足袋を自分の家の隅へ放り　かほる
軒の足袋がかん〳〵になつて妻　萬よし
濡れ足袋を提げて律氣に戻つて來　松郎
(人)濡れ足袋に水屋の醬油のまれる　双葉子
(地)手鉢の水が足袋に陽に光り　松郎
(天)猫の手付きで濡れた足袋を提げ　同
(軸)つゞくつた足袋も今朝から濡らしてゐ　新水

席題　大阪　源坊選

大阪を三年振りに來て迷ひ　柳狂
さすが大阪千前日の人出なり　新水
儲かつたのか大阪を褒めてゐる　かほる
懷れの大阪へ來てだまされる　双葉子
(佳)新しい文化に船場まつ二つ　松郎
(人)大阪の煙と煙もつれ合ひ　かほる
(地)村長は大阪に無い雜魚を出し　萬よし
(天)大阪は待たゞて置いてつりを　源坊
(軸)大阪はぢきに値段をきゝたがり

（以下次號）



編輯後記

▼一に一を足して行く主義の川柳雑誌社もその主義主張が理解ある人達の後援で、豫想以上にグン〳〵伸びて來たことは柳壇のため同慶に堪えない。▼這般設立された松山支部の發會式には二柳子、素人の兩君と私の三人が出席した。その行程は二柳子君が書いてゐるし、私は私として「道後二泊」を書いてゐるからこゝにはそれらに洩れた事を少しくつけ加へるにとゞめやう

▼歡迎宴の盛であつたことは、句會出席者の三分の二の人達が出席されたことによつても知られやう。從つて隱し藝といふよりも表藝らしいものが續出した殊に五健氏の野球ステゝコ。その他の妙技に至つては玄人はだしで全國川柳家中に於ての第一人者である。芳之助氏の獅子舞これに次ぎ、それからそれと興のつくるを知らなかつた。

▼松山へ行つて、松山の名所らしい名所を訪れるよゆうもなく子規堂すら觀ることが出來なかつた。二柳子、素人の兩君の如きは道後公會堂で句會があり、公園内で歡迎宴があつて、公園を散策することすら出來なかつた。いかに川柳會そのものが旺んであつたか、いかに柳友の熱が高潮してゐたかは蓋し想像に難くないでせう。

▼高濱に下船した一行は往復とも五健氏の勤務してゐる伊豫鐵道で運ばれたが、この鐵道は、一等と三等としかないことも一寸面白いと思ふ。

▲道後からの歸途、電車の中では降雨があつた。高濱港では霙が降つた。つゞいて待合所を横なでにする吹雪があつた。からりと晴れて虹が出た。それは榮にゆく川柳の瑞兆であらうと思つた。波は高かつた。棧橋の鐵板が二ツ折になつて搖れた。海をおそれる玄々子君だけが待合所に殘つてしきりに帽子を振つてくれた。

▼別府のことは：これ又二柳子君が書いてゐるので、こゝでは書かない。次號で更に何か書きたいとも思つてゐる。

▼十三日夜堀丸で歸阪の途についたが、われ等一行に隣りして寢轉んでゐた、一青年が大分滓を出てから間もなく、投身自殺を遂げた。僕でなかつてよかつたと素人君が云ふ。暫らくはこの話題で持ちきりであつた。

▼堀丸の中では堀口司厨長や、筒井事務長に御迷惑をかけた。貴賓室でお茶をよばれたり堀丸の船室、フレンチモダンのサルンなどを案内して貰つた。そして揮毫をしたり快談を交へたりしてゐるうちに神戸へついた。

▼さて愈々上陸近くなつたところで、二柳子君の靴が變つてゐることを發見した。大きさといひ色合といひ、殆んど違はないが、紐の手觸りが違つたので氣づいたのであつた。色々取調べたところが昨夜投身した青年の靴と變つたらしい。青年の靴は遺留品として今治の警察へ屆けたといふ。それが二柳子君の靴らしい。殘つてゐるのは幽靈の靴だといふ事にきまつてしまつた。それで今も二柳子君は幽靈の靴を履いてゐる。

▼南海の池澤樂居氏は近來熱心に篆刻をやつてゐる。日曜日も朝早くから出勤して夜十時までコツコツ彫んでゐられますと受付子が語つてゐた。私も印の寄贈をうけたので松山でも船の中でもベタ〳〵捺して來た。

▼私が旅に出た夜が本社の二月例會で私が中座したあとへ出席された紋太氏が私に代つてたちまち支部の設立に奔命してゐる。來るべき第一回の普選による市會に中原の鹿を逐ふべく意氣衝天の慨がある。素人、萬よし老に抗議を持ち込んで曰く、この頃はなか〳〵君に逢へない。今でさへさうであるから、萬一當選でもせうものなら、到底逢へないと思ふから、市會議員たることは止めて貰ひたいと。編輯局一同異議なく可決。

▼藤本卯之助君も市會にうつて出るといふ。コレは政友會大阪支部小壯派の策士だけに當選確實らしい。

校正の日に　（路耶生）

「自分はいつも路耶氏の話を聞くのを樂しみに出て來るのであるが今夜はそれを聞くことが出來なくて反つて私が話すことになりました」といつて川柳に對する有益な講話をされ次で兼題の選まで煩はしたさうである。

▼山雨樓氏は非常に輕快になられたさうで、次の月評會には出席されることになつてゐる。

▼顔を見るとゝどッかへ行かうといふ旅行夢想家の吉田蕾伯二月上旬とう〳〵尻をあげて柴谷蕾伯と二人で南紀南部の梅林から湯崎白濱の溫泉に出かけた。その收穫が本誌の表紙

▽二月五日加古川支部の水田黄彩氏を訪れ、折よく句會當夜で遲くまで御厄介をかけた。
▽鳥取支部の同人大擧して、伊勢參宮の歸途萬よし居を訪問された由、突隣のことで歡迎句會をすることの出來なかつたのは遺憾であつた。
▽南紀田邊から來阪され、烏ヶ辻にキリンテイノウスを開店された、堀楓林氏の宅で、一月廿六日夜道頓堀支部主催の川柳談會を開催。抽籤順による五分以上の漫談に、さても愉快な一夜を過した。
▽兼而蒐集中だつた日鶴懸賀川柳は非常な好評で本誌にその發表が廣告されて居ます
▽堺支部は近來非常に元氣旺盛で、來る三月三日金熊寺へ吟行をされる(廣告參照)南海獨特の趣向があるらしいから多數の參加を希望する。
▽石川双葉子、鞆田新水諸氏の肝煎で今回守口支部を新設、三月上旬創立句會を開催される豫定である。
▽私の親友で中央美術の編輯をされてゐる、横川三果軒氏が隨筆雜誌「清談」を發刊された氣のきいた体裁で、一部十錢。購讀希望の方は小生迄おしらせ下されば見本を呈上する(ひろし記)
▽この間雪の北陸を訪れた折、だしぬけに小松支部を驚かし、大變な迷惑を掛けた上に、思ひがけなくも皆様から御歡待に預り、厚く御禮申しあいます。
▽それから金澤に久流美、銀砂子、眼隱子の諸君を訪問したが何分突然の事でお眼にかゝる事も出來なかつた(素人記)
▽松山支部創立句會が二月十一日に開催されるので、それに出席するため九日夜天保山棧橋から綠丸で路郎先生と共に出發。十日午前十時高濱へ上陸。五健冷々子、玄々子、水樹、大鷲諸氏にお迎ひをうけ直ちに自働車にて海南新聞社を訪問後、道後溫泉岩井屋旅館に落着き出迎の諸氏と共に一盞を傾けた。
▽十一日素人氏遲れ走せに來松午後一同創立句會に出席、翌十二日五健、冷々子、玄々子、芳之助の諸氏に見送られて十一時高濱棧橋で別れをつげ別府に向ふ。午後四時別府棧橋に着、別府支部の人々のお出迎ひをうけて松屋別館に投宿、當夜旅館で句會を催し、翌十三日三猿堂氏の案内で一同地獄廻りをなし午後路郎先生は晃卓氏同伴大分市へ赴かれ大分新聞社を訪問され素人氏と私は再び三猿堂氏の案内で市内を見物し、當夜晃卓、三猿堂その他の諸氏に見送られ九時ト帆の蓮丸で歸阪、途中高松港で社友の喜田飯山氏に出迎へられ暫く船中で快話し、近く御來阪を約して別れました。
▽二月十一日松山支部創立句會はなか〳〵の盛會でした(會報參照)幹事の勞を多としてゐます。
▽北濱支部の幹事谷村稔氏は六角桂風氏と交替されました。
▽鍛川支部の幹事森田笑太郎氏は伊藤綠之助氏と交替。綠之助氏は柳誌「神在月」を廢刊して本社籤川支部のため活躍されることになりました。
▽本社客員前田雀郎氏は一月廿八日目出度華燭の典をあげられました。
▽中西五合氏は去る一月十八日目出度結婚されました。
▽社友酒井駒人氏の令息が御病氣の由一日も早く御全快を祈る
▽詫間三猿堂氏は右手を負傷され不自由なうちにも作句をつゞけてゐられます。
▽松山市大街道の弘文社が「川柳雜誌」の賣捌所となり、また子健氏は本誌のポスターを作つて本社のために御盡力下されてゐます。
▽三月號は二月十七日路郎先生ひろし、卓郎、素人、琴人と私の六人で事務所で編輯(二柳子)

移轉

青龜南汀氏は大阪市西淀川區海老江上三丁目一四八へ▽辰巳離楓氏は大阪市港區市場通二丁目二小林末治郎方へ▽佐久間折草氏は京都市下京區四新道四條上ル五〇へ▽辻本昌平氏は大阪市港區九條北通一丁目二一へ▽平田楢雨氏は大阪市北區堂島中一丁目ハ四サクラヤ書店方へ▽土井文蝶氏は大阪市西成區千本通七丁目六へ▽川柳使命會は大阪市東淀川區中津濱通二丁目七七塚崎松郎方へ各轉居

改號

▽石田田郎氏は沐天と改號

訂正

前號の四三頁「子守」太田朝陽選の中に「敎會の書を子守は唄つてる、田郎」とあるは白郎の誤。

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の原稿紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第五號課題

三月五日締切（各題十句以内）

▼雨蛙　椙元紋太選

▼寢臺　矢田冷刀選

▼心中　西本三笑　北山悟郎　共選

第六卷第六號課題

四月五日締切（各題十句以内）

▼老夫婦　森東魚選

▼宿引　高橋かほる選

▼念佛　竹内多門　松盛琴人　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號一部金參拾錢
新春特輯號一部金五拾錢
八月特輯號一部金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和四年二月廿五日印刷
昭和四年三月一日發行

第六卷第三號（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替大阪七五〇五〇番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館
（函館）石塚（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

末弘嚴太郎　池澤樂居

客員

大道弘雄　伊藤彦造　岡本一平　西原柳雨　片岡直方　大島壽明　嘉納純　岡田三面子　田中辰二　川上三太郎　田中香涯　川村花菱　長崎柳秀　吉岡鳥平　國枝史郎　吉田清　藤村作　武笠山椒　藤本卯之助　安川久流美　小酒井不木　前田雀郎　赤井清司　小出楢重

木村半文錢　柴谷柴舟　篠原春雨　竹内多聞　矢田冷古刀　蛭子省二　藤井駒人　森東魚　相元紋太　高見柳骨

特別社友

岩崎柳路　原史風　西本三笑　徳田双柳　太田朝陽　龜井花童子　高橋かほる

伊藤愚陀　伊藤緑之助　猪野燕桂風　角六柳　石川双葉子　長谷川一徹　本田柳一路

維持社友

北山悟郎　喜田飯山　酒井駒人　中野柳陽　中澤濁水　中見光路　中島鐵洲　桑原京郎　柳川洲馬　西杏三　安井ひろし　淺井冷々子　楊丘井二　松盛琴人　麻三好生革郎　高橋緑郎　辻左馬　川眼隱子　檜山千代二　嶋田翠峯　水谷鮎美　白鷗　兼重水田黄彩　詫間三猿堂　朝田新水　青山孤舟　友淵貴山　牧田魯門　越村加香　主幹麻生郎

編輯局（特別社友）

岩本素人　橋本二柳子　川合舟々　住田亂耽

道頓堀支部　大阪市南區新戎橋南詰　幹事　庄万よし

天滿支部　大阪市北區北森町三十二　幹事　北山悟郎

濱寺支部　大阪市外高石町羽衣　幹事　太田朝陽

神戸支部　神戸市花隈町九六　幹事　楊井二南

山口支部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬

東京支部　東京市芝濱松町一ノ十五建興商會　幹事　岩崎柳路

函館支部　函館市青柳町五〇　幹事　龜井花童子

仁川支部　朝鮮仁川仲町一丁目八　幹事　矢田冷刀

松江支部　松江市外川津野津方　幹事　松丘町二

小松支部　石川縣小松町猫橋詰　幹事　本田柳一路

高知支部　高知市本與力町　幹事　中澤濁水

梅田支部　大阪市此花區喰甲町二丁目七九　幹事　水谷鮎美

螢ヶ池支部　大阪市外阪急沿線刀根山療養所内　幹事　牧田普門

金澤支部　金澤市八幡町五三　幹事　中川眼隱子

糸屋町支部　大阪市東區糸屋町二丁目七　幹事　川合舟々

田邊支部　和歌山縣田邊町幽靈松下　幹事　辻左馬

簸川支部　島根縣簸川郡高松村　幹事　伊藤緑之助

豐橋支部　豐橋市旭町　幹事　高橋緑郎

平塚支部　神奈川縣平塚町旭座前　幹事　酒井駒人

加古川支部　兵庫縣加古川町大川町　幹事　水田黄彩

京都支部　京都市七條大宮東入　幹事　桑原京郎

富岡支部　山口縣防府町宮市八王子山　幹事　兼重白鷗

鳥取支部　鳥取市川端町一丁目　幹事　中島鐵洲

北濱支部　大阪市東區北濱一丁目一六竹内方　幹事　六角桂風

別府支部　別府市驛前通り　幹事　詫間三猿堂

堺支部　堺市大町西三丁目十三　幹事　友淵貴山

松山支部　松山市外祝谷　幹事　淺井冷々子

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本 高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

洋裝美本 全一冊 定價 五十錢 郵稅 二錢

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

白鶴懸賞川柳當選發表

本誌一月號に於て募集しました川柳「白鶴と長命」は多大の御好意により五百餘名の應募者を得ました入選句は素より選外にも佳作の多かつたことを誠に光榮といたして居ります弊社のこの擧を盛にして下さいました投句家各位へ厚く御禮申上げます。

白鶴釀造元
御影 嘉納合名會社

白鶴と長命
岩本素人選

（天）賞金 五 圓
鳥根縣簸川郡高松村
伊藤 綠之助

白鶴に俺等の若い時の唄

（地）賞金 三 圓
京城府花園町一二二荒木方
涙野 夕ネ

白鶴にきめて老後の二三猪口

（地）賞金 三 圓
大阪市東區糸屋町二ノ十
八木 壽仙

白鶴が一さし舞はす老の腰

（人）賞金 一 圓
神戸市水木通二丁目九ノ十
西村 芳彦

天盃は白鶴注いで見てもらひ

（人）賞金 一 圓
大阪市此花區上福島南三丁目
十三絃堂 主人

天盃で白鶴を干し祖父謠ひ

（人）賞金 一 圓
住吉區安立町五丁目
晴信

三夫婦に白鶴の出る渡り初め

（人）賞金 一 圓
東區糸屋町二丁目十
菊地庵

白鶴が續けさせてる朝詣で

（人）賞金 一 圓
東區横堀一丁目白鶴嘉納店
篠崎 九皐

白鶴を飲んでかれこれ五十年

以下佳作（粗景）

西成區粉濱町
長命の家風白鶴でんと据ゑ　中見 光路

西區北堀江御池通
天杯の家に白鶴据つて居むさし

神戸市北長狹二
孫の成長と白鶴があるばかり　森田美禰男

仁川增田屋方
白鶴一こん須彌蕩仙の夢せんかく

函館榮町
白鶴の機嫌で天保人踊り　大谷 南翠

西成區北神合町
白鶴の元氣曾孫と相撲とり　森 青路

東區糸屋町
白鶴を嗜く巾着のやうな口　不老人

御影町城前
白鶴酒一杯毎に皺が伸び　佃 勝三

大和龍田町五百井
白鶴を据へて米壽も悲なし　嶋田やゑ女

住吉區安立町
養老盃と白鶴とある松の内　太閤

大正十二年二月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年二月二十五日印刷納本　昭和四年三月一日發行

川柳とは何ぞや——の數萬言を聽くよりも本書を繙け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

川柳漫畫 累卵の遊び

定價 壹圓（送料拾錢）

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になさいます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（霞乃）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの——。

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。

「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——。

◇輕い讀物として　紅茶の後で、電車の中で……

不朽洞

東京市外杉並町並高圓寺二八三
振替東京七六七八八番

大阪市西成區千本通五の七
振替大阪五二五八五番

川柳雜誌（第六十二號）　定價三拾錢